II. 遺跡調査の概要

北丹波（きたたんば）・東流（ひがしながれ）遺跡

所在地　稲沢市下津丹下田町・下津森町・下津下町西一丁目
（北緯35度15分6秒 東経136度49分39秒）
調査理由　街路改良工事（都）名古屋岐阜線
調査期間　平成27年5月～平成27年7月
調査面積　390㎡
担当者　永井宏幸


調査地点（1/2.5万「一宮」）

調査の経過　県道名古屋岐阜線の街路改良工事事業にともなう事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、発掘調査を実施した。調査は、平成24度に2,320㎡、平成25度に1,000㎡、本年度に390㎡おこなった。調査区は現道に沿って、街路改良部分を対象とした。今年度は県道の西北部分を調査した。

立地と環境　遺跡は、遺跡の北東側にある青木川右岸に広がる自然堤防およびその後背湿地に立地する。標高は現況４～５ｍ前後である。

今回の調査区は明治17年地籍図によると水田に相当する。調査区の大半は中近世の流路（あるいは池）が横断し、調査中、湧水に悩まされた。

調査の概要　古墳時代の遺構と遺物は、調査区南端で確認した。中近世の流路・池001SDによって古墳時代に相当する堆積層が削平されていたことから、001SDの南側に狭い範囲で古墳時代の包含層が残っていた。ここから、幅１ｍ前後の畦に区画された水田を検出した。遺物は水田の周辺から廻間Ⅲ式の壺や甕が少量出土した。

古代の遺構と遺物は、調査区北端で確認した。古墳時代の遺構と同様に、中近世の001SDによって削平されていた。調査当初は、調査区壁面のトレンチ掘削中に、焼土・炭化物を含む堆積土とともに須恵器などがまとまって出土したので、竪穴建物などを想定していた。ところが、トレンチから遺構の輪郭は捉えられなかった。001SDの掘削を進めていくと、001SDの輪郭に007SDとの切り合い関係が判明した。改めてトレンチを設定し、ようやく007SDの断面を確認した。８世紀代の須恵器がまとまって出土し、001SD内から出土する多くの須恵器は007SDに関連する資料群の可能性がある。

中近世の遺構と遺物は、001SDが注目できる。001SDは明治17年地籍図と照合すると、ほぼ水田の区画と一致する。また、検出ラインに沿って、近代以降の畦板と杭列が認められ、遺跡と地籍図の重なりが追検証できた。当初は位置関係と堆積状況から、県道を挟んで南東に位置する12F001SDと同一遺構を想定し、中世の時期をしていた。ところが掘削を進めていくと、出土する遺物に近世陶器が少量ながら認められることから、堆積層の大部分は近世以降であると判明した。加えて、調査区壁面などの堆積層の検討から、大きく２つの堆積に分かれることがわかった。つまり、中世と近世の２時期にわたる堆積層が存在し、001SDの南側は２層、北側は１層で、中世の堆積に近世の堆積が少し北側にずれて堆積していた。また湧水が激しく、作業上の安全から近世の堆積層の途中で掘削を断念した。近世の堆積は南端に斑土状の堆積が認められ、人為的に埋めた痕跡が残っていた。これは12F001SDの状況と類似し、12F001SDも部分的に近世の堆積を含む可能性が高くなった。この斑土状堆積より上位層は、流水性、止水性堆積が交互に認められ、川あるいは

池である可能性を示唆する。中世の堆積層は部分的であり、確定できないが、近世同様に川・溝の可能性を想定しておきたい。出土遺物は、13世紀前後の中世陶器を中心に、古代の須恵器など幅広い時期の遺物が出土した。

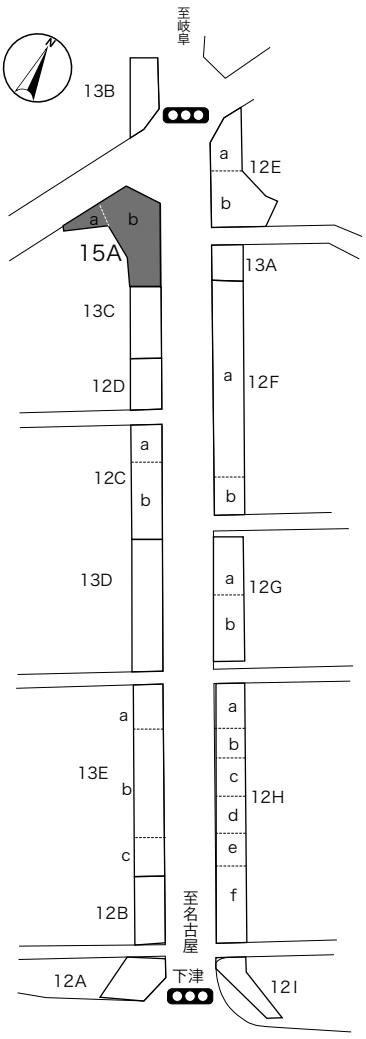
ま と め　今回の調査は、中近世の川・池跡の可能性がある001SDによって調査区の大半が覆われていた。部分的に削平を免れた古代の溝と古墳時代の水田が調査区の北端と南端に残存していた。ここで、過去２次の調査成果を合わせて振り返る。おおよそ幅５m、南北200mにわたる細長い調査区であったため、遺跡の全容は把握しにくい一方、地形変化の情報は多岐にわたり得ることが出来た。現況に表出しない明治17年地籍図などの土地利用を比較してみると、水田など低い土地利用の地点は流路があり、畑地など高い地点は中世の遺構が展開する。また、古代の遺構は方位に沿った遺構群ではなく、当時の自然地形に沿った可能性が高い。古墳時代の耕作地は農水路と考えた大溝の方向から、古代と同様に自然地形に沿った土地利用が想定できる。　（永井宏幸）



遺跡全景



15A区完掘状況



調査区位置図　1:2,000

下懸（しもかけ）遺跡

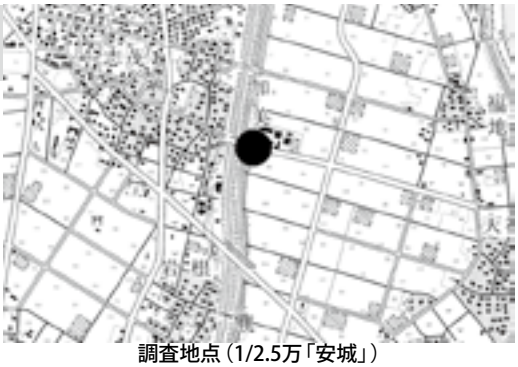
所　在　地　安城市小川町向田
（北緯34度54分27秒 東経137度05分43秒）

調 査 理 由　中小河川改良事業（鹿乗川）

調 査 期 間　平成27年11月～12月

調 査 面 積　280㎡

担　当　者　松田 訓



調査地点（1/2.5万「安城」）

調査の経過　調査は、愛知県建設部による中小河川改良事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、平成27年11月から12月にかけて実施した。調査面積は、280㎡である。

立地と環境　遺跡は安城市東部に所在し、矢作川とその支流によって形成された沖積地上に立地する。調査区は碧海台地縁辺部に位置し、東側は矢作川沿いの低地が広がっている。下懸遺跡は、今回の調査地点の南側にて、弥生時代中期～古墳時代前期を主体とした遺物、遺構がこれまでの調査で確認され、集落の存在も明らかになっている。本調査区は、下懸遺跡の北端に位置する。調査地点の北側には、鹿乗川沿いの低地に弥生時代後期～古墳時代前期の墓域、集落を主体とした寄島遺跡が展開する。遺構の検出高は、標高約7m前後を測る。

調査の概要　今回の調査では、下面から古墳時代前期の竪穴建物、古代の溝、上面から近世の水田等が確認された。この中で竪穴建物の可能性が考えられる遺構は、1基検出された。平面形態は隅丸方形を呈するものと思われるが、部分的な検出であるため、全形を把握できていない。床面が貼られたと思われる層の下位では、幅の広い溝が平面プランに沿うように設けられていた。床面と考えられる層の直上では炭化材が広がっていて、焼失家屋の可能性も考えられる。遺物は、古墳時代の前葉と考えられる土器が出土している。この竪穴建物跡を切って、幅約1mの溝が検出された。東西方向に走るこの溝からは、土器片とともに平安時代と考えられる灰釉陶器が出土している。上面で確認された水田は、大畦から小規模の区画で小畔が設けられていた。下面の下位では、調査区全体に自然流路が確認され、古墳時代初頭の遺物が確認されたため、調査地点はこの時期の直後に陸化したと推測される。今後、台地縁辺部での土地利用の仕方などが、検討課題となるであろう。（松田 訓）



調査区全景（西から）



竪穴建物跡と溝（西から）

東小笹（ひがしこざさ）遺跡（範囲確認）

所　在　地　豊田市越戸町東小笹・西小笹
（北緯35度06分46秒　東経137度11分00秒）

調 査 理 由　国道153号線豊田北バイパス

調 査 期 間　平成27年５月11日～平成27年５月15日

調 査 面 積　30㎡

担　当　者　早野浩二



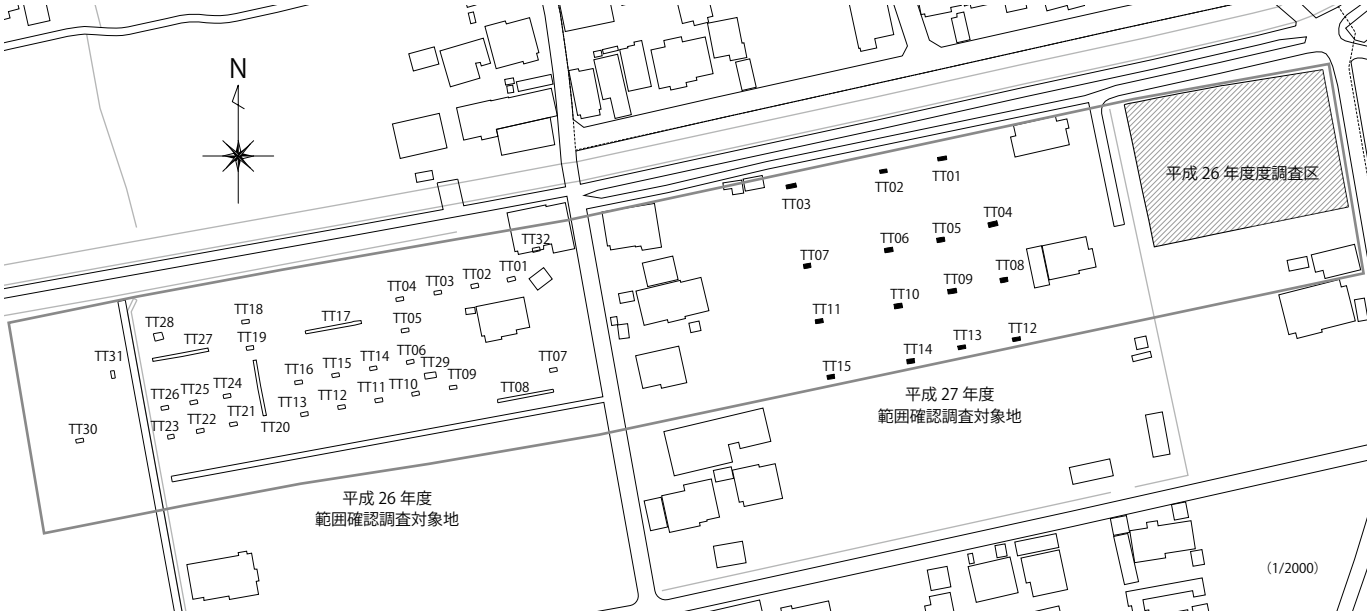
調査地点（1/2.5万「豊田北部」）

調査の経過　発掘調査は国道153号線豊田北バイパス建設に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局名四国道事務所から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。

今回の範囲確認調査は、平成26年度に本発掘調査と範囲確認調査を実施した中間の事業予定地を対象として実施した。対象地は過去、平成24年に愛知県教育委員会が試掘調査を実施し、遺跡の範囲内であることが報告されているが、検出された土坑状の遺構の時期は不明で、出土遺物もごく少なかっ たことから、本発掘調査実施前に、遺跡の範囲や残存状況、性格にかかる情報をより多く収集することが求められていた。

東小笹遺跡は矢作川右岸の低位段丘（越戸面）東端に立地し、遺跡には真言宗宝隆院境内が含まれていた可能性も想定されている。遺跡周辺には段丘南 端に小笹古墳、上位の段丘（碧海面）に宇津木Ａ遺跡、宇津木Ｂ遺跡、宇津木古墳が分布する。

調査の結果　今回の範囲確認調査の対象とした地区は、表土・客土直下に地山が露呈することが多く、明確な包含層、遺構は確認されなかった。隣接する耕作地には 古代、中世、近世以降の土器・陶磁器が散布するが、範囲確認調査によって出土する遺物は表土（耕作土）に伴うごく少量の小片のみで、遺跡の存在を積極的に示すものではない。遺跡周辺はすでに大規模な圃場整備が行われたとのことから、遺跡のかなりの部分は削剥され、滅失している可能性が高いと推察される。　（早野浩二）



東小笹遺跡試掘坑配置図（1:2,500）

おかやまみなみ 岡山南遺跡

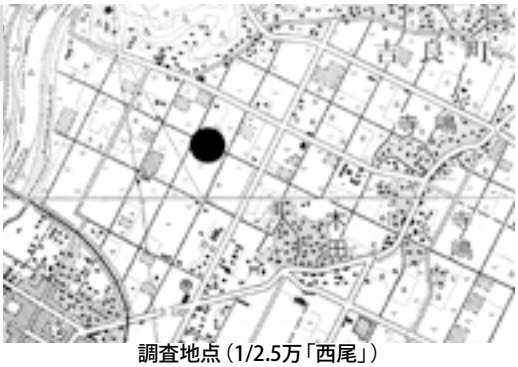
所　在　地　西尾市吉良町木田
（北緯34度50分15秒　東経137度04分38秒）

調 査 理 由　道路改良工事西尾幡豆線

調 査 期 間　平成27年6月～9月

調 査 面 積　850㎡

担　当　者　池本正明



調査地点（1/2.5万「西尾」）

調査の経過　調査は、一般県道西尾幡豆線建設にともなうもので、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成27年6月～9月で、調査面積は850㎡である。

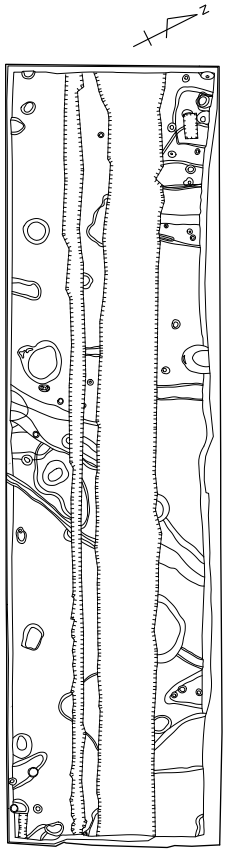
立地と環境　遺跡は矢作（古）川左岸の標高3.5m程度の微高地上に位置する。調査は平成23年度（910㎡）と平成24年度（1075㎡）にも実施され、古墳時代・古代・近世の遺構が確認されている。なお、本年度5・6月にも遺跡の西端を確認する範囲確認調査を実施している。

調査の概要　調査区は平成24年度調査区の西側に接した位置となる。調査区は、西側が微高地の東端、東側がその縁辺部の低地となる。後者は平成24年度調査区の西側で検出された低地に連続する。

検出できた遺構は希薄だが、上下二面の検出面を確認した。上面の遺構は微高地に接する低地部分で戦国時代以降の水田、下面の遺構は古代を中心とし、低地部分で溝・井戸、微高地側で竪穴建物を検出している。（池本正明）


上面遺構全景


下面遺構全景



下面遺構全体図（1:500）

岡山南（おかやまみなみ）遺跡（範囲確認）

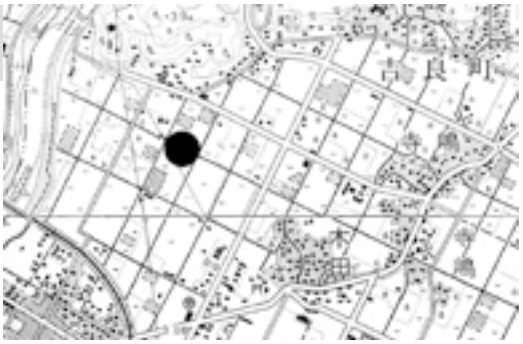
所　在　地　西尾市吉良町木田
（北緯34度50分15秒　東経137度04分38秒）

調 査 理 由　道路改良工事西尾幡豆線

調 査 期 間　平成27年5月～6月

調 査 面 積　100㎡

担　当　者　池本正明



調査地点（1/2.5万「西尾」）

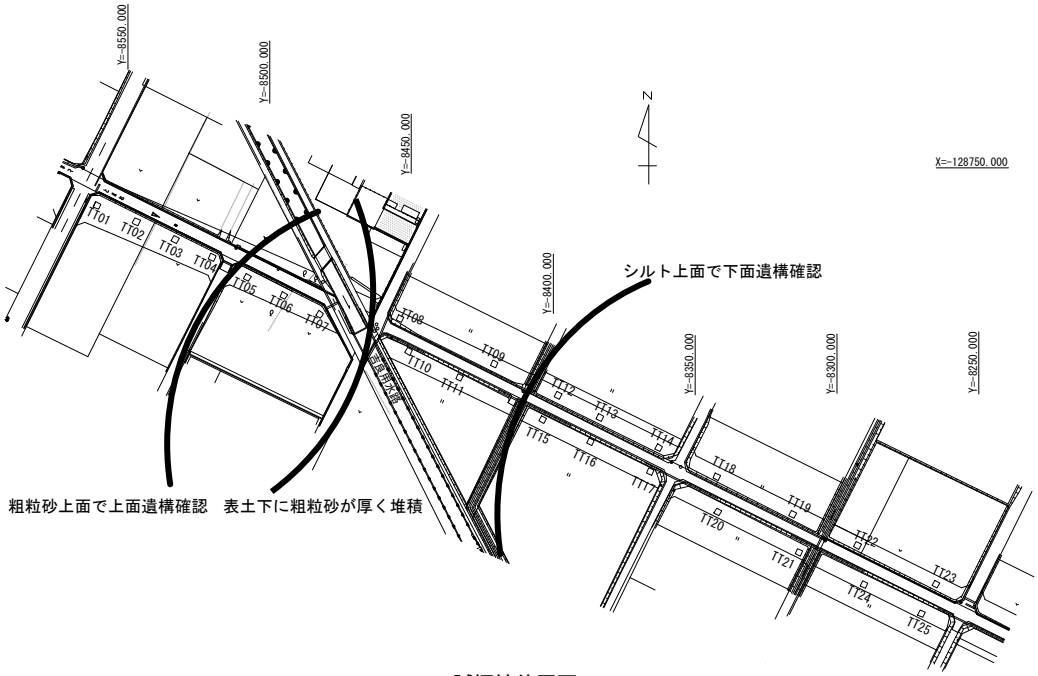
調査の経過
立地と環境
調査の概要

範囲確認調査は、一般県道西尾幡豆線建設予定用地内における岡山南遺跡の西端の確認を目的としたもので、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成27年5・6月で、調査面積は100㎡である。

岡山南遺跡は矢作（古）川左岸の微高地上に位置する。遺跡の北側には「岡山」と通称される三河山地から伸びる丘陵が位置し、中根山遺跡・吉良八幡山古墳・若宮古墳群など、比較的著名な遺跡が分布している。岡山南遺跡の調査は平成23年度（910㎡）と平成24年度（1075㎡）に実施され、古墳時代・古代・近世の遺構が確認されている。

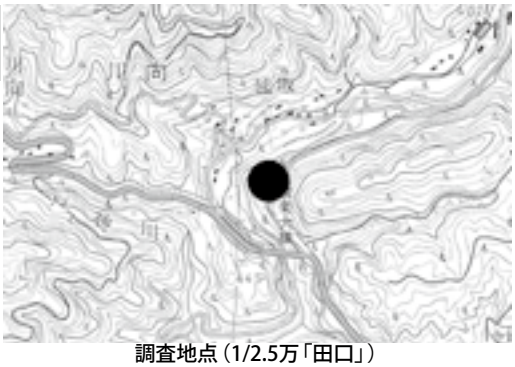
今回の範囲確認調査は岡山南遺跡の西端を確認するため、本年度調査区の西側にTT01～TT25の25か所の試掘坑を設定した。遺構はTT05以東で比較的濃厚となる。なお、TT05～TT15間では粗粒砂の堆積が確認されており、旧河道の可能性が高い。なお、ここでは粗砂層上面でも遺構を確認している。出土遺物は、ほぼ全ての地点で古代・中世の遺物が得られたが、西側では希薄となる。また、TT15以東ではこれに古填時代の遺物が加わり、量的にも多量となる。

（池本正明）



試掘坑位置図

笹平（ささだいら）遺跡



調査地点（1/2.5万「田口」）

所在地　北設楽郡設楽町大字小松字笹平
（北緯35度06分45秒 東経137度34分01秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　平成27年5月～12月

調査面積　6,930㎡

担当者　鈴木正貴・蔭山誠一・川添和暁

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム関連事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、平成27年５月から12月にかけて実施した。調査面積は6,930㎡で、15A区・15B区・15C区の三調査区に大きく分けて調査を行った。

立地と環境　遺跡は境川の東側（左岸）、川に対して西に張り出す段丘上に立地する。段丘は、川側が標高385m前後と低いのに対し、中央が標高387m前後と一段高くなる。川側の低い段丘部分をA区、高い段丘部分の西側半分をB区、東側半分をC区とした。段丘の地盤形成層は古い河川堆積層で、山側（東側）ではシルト層が、谷側（西側）では砂層が主体となっており、A区とB区の境とB区とC区の境では巨礫が多く認められた。特に、B区・C区の巨礫群は旧河道由来の黒色土の中に存在しており、段丘の中心にある巨岩（笹平岩とする）もこの黒色土に伴うものである。

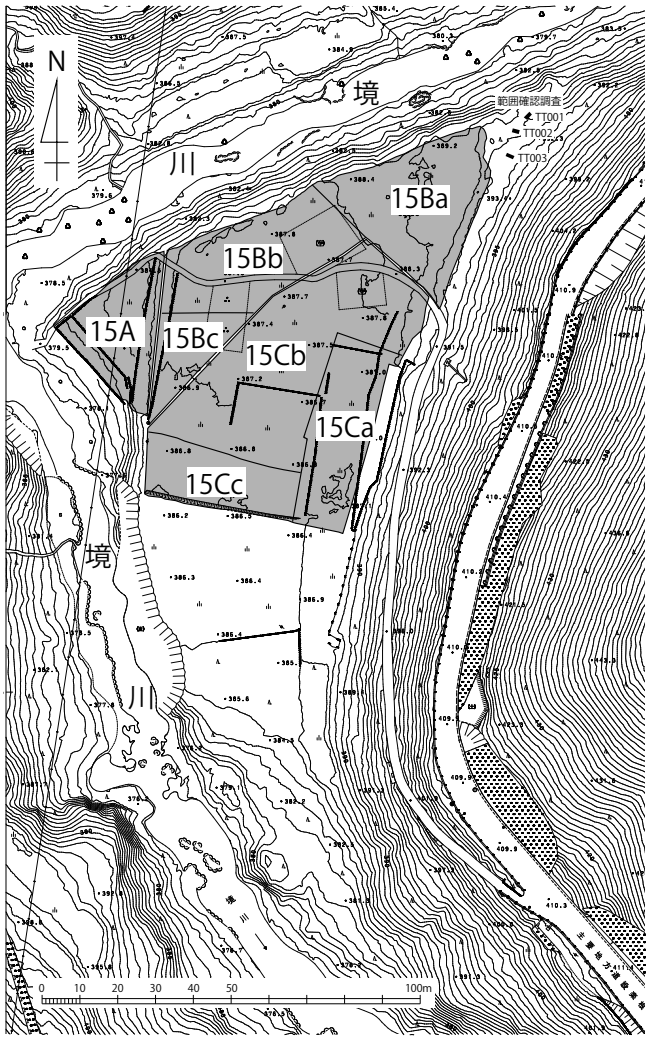


図１　調査区位置図（1:2,000）

調査の概要

A区

晩期包含層　A区は厚さ1mの土石流堆積層の下で、層厚20cmほどを測る縄文時代晩期の包含層（黒褐色シルト層）および土坑・ピットなどの遺構が確認された。晩期包含層中で見つかった礫群は円弧を描くようにも見えるが、礫自体は河川由来の円礫ではなく山側由来の角礫である。調査区北端から岩偶岩版類が1点、南側では大型の撥形を呈する打製石斧が1点出土した。晩期包含層下には、層厚50cmを測る褐色砂層があり、

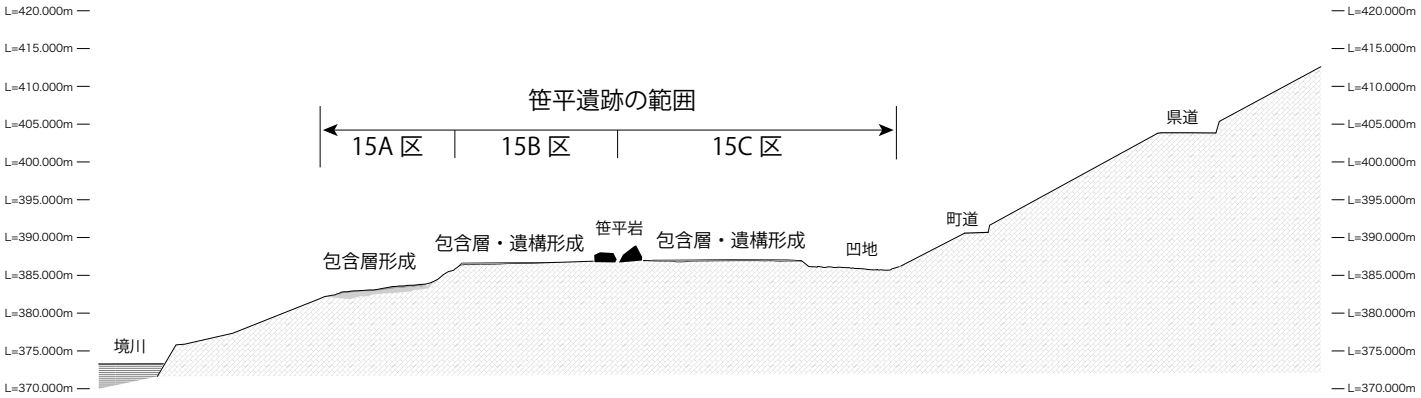


図2　笹平遺跡立地の模式図（1:1,000）

摩滅を受け細片化するなど、流れ込みの状況で縄文時代後期の土器片が出土した。さらに褐色砂層の下、15B区側の崖下では、崖際ラインに沿って落ち込みが見つかった。この落ち込み内からは縄文時代中期後半の土器片が、大型破片の状態でまとまって見つかった。土器溜まりであろうか。

中期後半の土器出土

B区・C区　B区・C区は段丘の高い部分の調査区であるが、調査区全体が一様な平坦面となっている訳ではない。Ba区は東側丘陵部から連続し、南西のBb区・Bc区に向かって下がる緩斜面となっている。また、Ca区およびCb区南東側は浅い凹地となっており、Cc区は南側に向かって地形が低くなっている。

主要遺構　B区・C区で確認された主要遺構は、以下の通りである。

縄文時代中期後半：竪穴建物跡1棟、柱列1（ピット2基）

縄文時代中期後半から後期（多くは後期初頭～中葉が中心と考えられる）

：竪穴建物跡31棟、竪穴建物跡との関係が不明の炉跡5基、貯蔵穴などの土坑14基、土器埋設遺構5基（炉の中に埋納されたものを除く）、集石遺構10基、柱列2（ピット2基と3基）、掘立柱建物跡1軒、大型石棒および立石を伴うピット4基、礫群1、その他土坑および柱穴多数

晩期前葉～中葉：石敷遺構（炉の可能性もあり）2基、土器棺墓1基

弥生時代前期：土器棺墓1基

古代：土坑1基

遺構の分布　段丘の中心、笹平岩を挟んだ東西、および北側から、竪穴建物跡群と土坑群が集中して見つかった。これらの遺構が展開する範囲は、Ba区南端・Bb区とBc区の全面・Cb区の南東側を除いた区域・Cc区の北端で、地盤の高い範囲に建物跡などの遺構形成が認められてた。

竪穴建物跡　竪穴建物跡の炉跡は、石囲炉跡や石敷炉跡が多く、土器の埋納された炉跡なども見つかった。竪穴建物跡の平面プランは、撹乱などの影響を受けて掘り方が極めて浅くなったものが多いため、その検出は困難であった。炉跡とピット列のみが検出される場合もあり、時期を比定できる遺物が伴うものはあまり多くない。平面プランは、隅丸方形状を呈するものが多く、円形プランを呈するものも含まれる。周囲の状況から、多くのものは縄文時代後期初頭から中葉に属するものと想定される。各遺構の新旧関係などは図３に記した。ここでは、竪穴建物跡の中でも特徴的なものについてのみ記載する。

Cb区3893SIは、縄文時代中期後半に属する笹平遺跡で最も古い段階の竪穴建物跡である。長辺4.8m・短辺4.6mを測る隅丸方形プランを呈するもので、深さは検出面から約50cmを測る。埋土中からはまとまった土器片・石器が出土しており、堆積の状況から北側

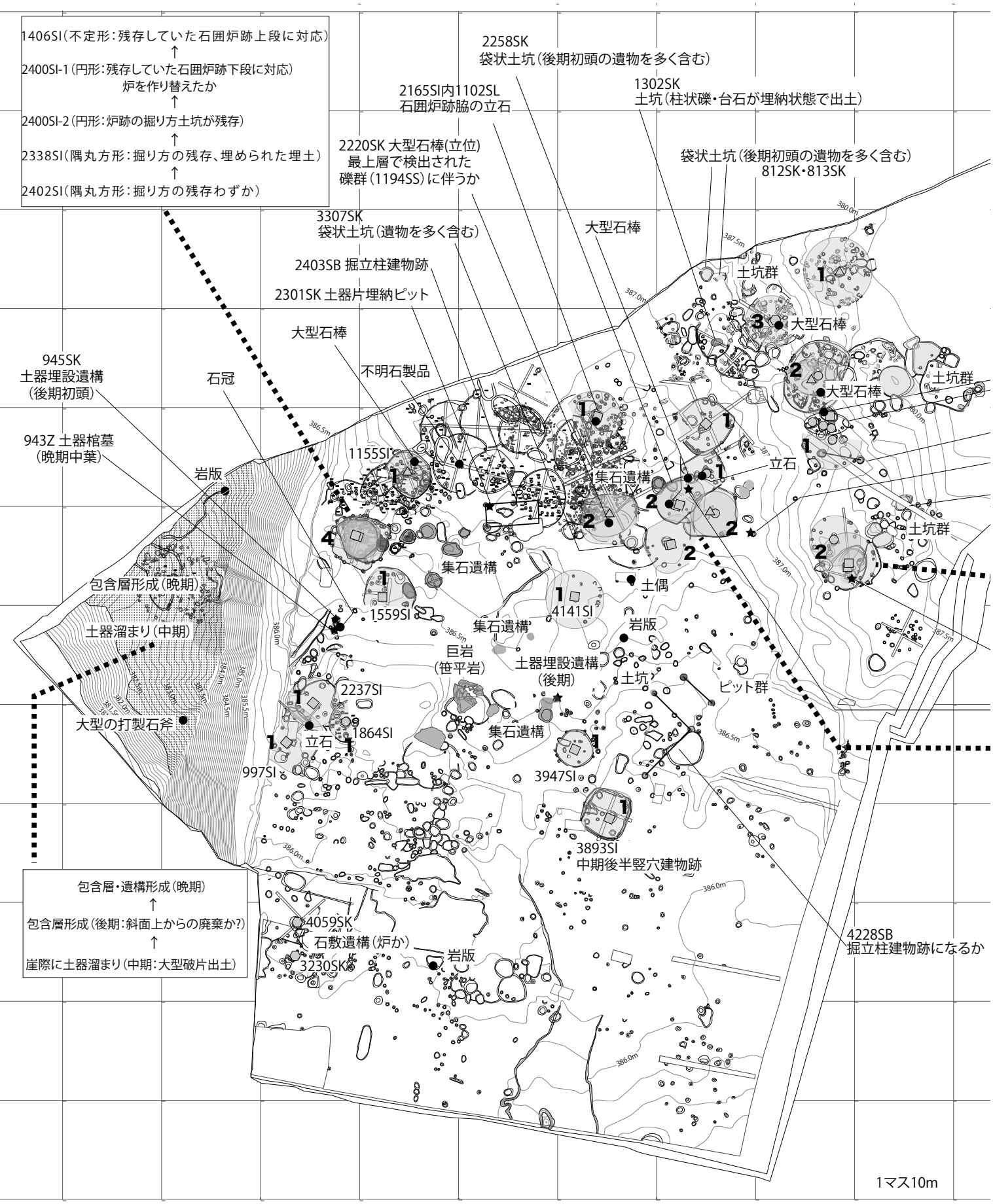
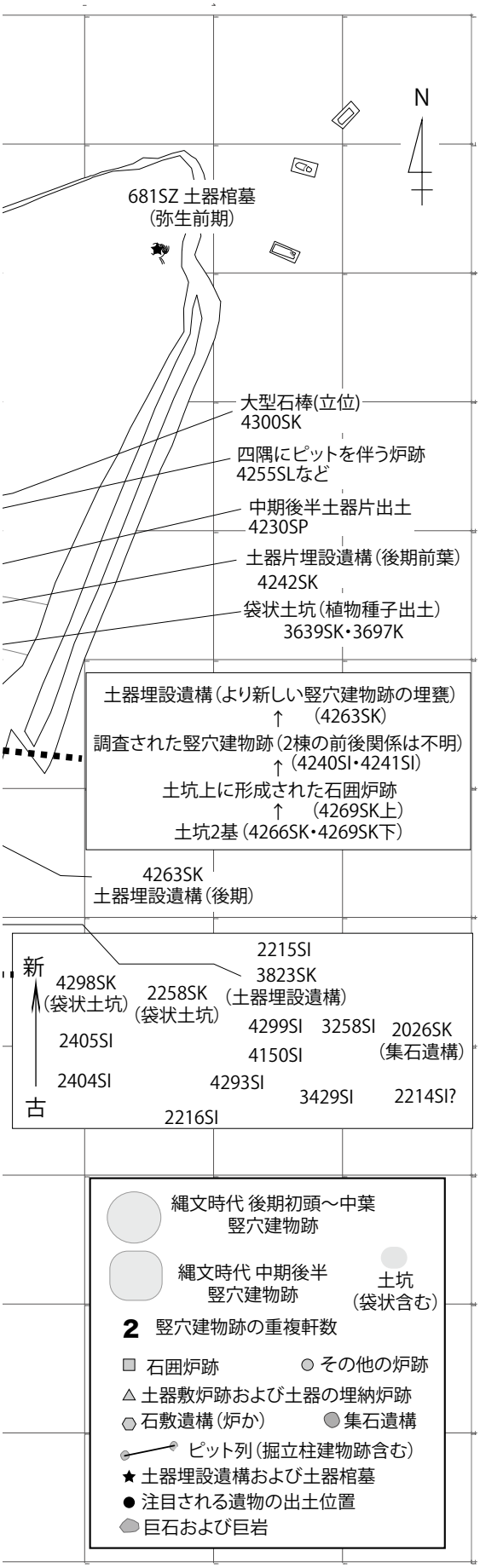


図 3　遺構全体図（1:500）



より廃棄されたものと考えられる。床面を検出した結果、中央に石囲炉跡、四隅に主柱穴跡、掘り方の下場周囲には周溝が検出された。石囲炉跡は中央よりやや東側に存在しており、掘り方は一辺1m20cm四方で、40cmを測る深さの中に、上下2面の機能面が確認された。この西側には巨礫を含む浅い土坑状の遺構が見つかっており、入り口部の痕跡かもしれない。主柱穴跡の掘り方は径60cm・深さ50cmほどを呈する。壁溝は溝に平行して土層断面を確認したところ、小ピットの連続を確認することができたことから、壁には細い柱が立てられていたことを確認された。

Cb区3947SIは、径3.8mほどのやや不整な円形を呈する竪穴建物跡で、掘り方は深さ20cmである。中央には7基ほどの柱穴があるほか、掘り方周囲に沿って壁柱列が検出された。中央には一辺50cm四方・深さ25cmの掘り方を有する石囲炉跡が配されていた。この石囲炉跡は、薄い板状石が４枚方形に配置されたもので4141SIの3628SLも同様の構造である。

Ba区にほど近い、Bb区とCb区の境では、袋状土坑・土器埋設遺構・集石遺構のほか、計10棟の竪穴建物跡が重複していることが確認された。これらの中で、Bb区2216SIが最も古いものである。2216SIは、一辺が5mほどの隅丸方形プランを呈するもので、最も深いところで20cmの掘り方を確認することができた。床面中央には炉跡、四隅には主柱穴跡、掘り方内の壁際下には壁溝が確認された。炉跡は、長軸130cm・短軸100cmを測る不整形な楕円形の掘り方内に角礫が配されたもので、この中から後期初頭に属する深鉢土器片が多数出土した。4293SIと4299SIとはほぼ同じ場所に重複する竪穴建物跡である。それぞれ、3320SLと3303SLという石囲炉跡を有しているが、3320SLの上に3303SLが重複しており、3303SLの石囲いの一部は3302SLの石囲礫をそのまま利用している様子が確認された。3429SIと3258SIも、4295SLと3294SLというそれぞれの炉跡が上下重複した状態で見つかった。3294SLは深鉢胴部二個体が入れ子状に埋設された炉跡である。

Cb区北東端では、径1mを測る大型の土坑（4266SK・4269SK）と石囲炉跡を有する竪穴建物（4240SI・4241SI）との重複が確認された。大型の土坑4269SKは、その上層に敷かれたように礫が配され、焼土・炭化物を伴うことから、炉跡であった可能性が高い。これら土坑に重複する4240SIの炉跡4152SLは、長軸1mほどを測る石囲炉跡と考えれ、掘り方縁辺には炉石の痕跡が多数検出された。

Ba区では、788SIと790SIが確認された。788SIは南北方向にややずれて、2棟が重複しているものと考えられる。隅丸方形ある

いは円形プランを呈するもので、一部には壁柱列も確認されている。炉跡はそれぞれに対応する形で2基見つかっており、その内の1基は土器敷炉跡である。788SIは、土層断面の観察から3棟の竪穴建物が重複していたものと考えられる。平面プランは円形あるいは隅丸方形プランを呈していたものと考えられるが、確証はない。炉跡は石囲炉で炉内に土器敷きおよび炉体土器が認められた。炉体土器は上下にレベルを違えて複数個体認めらたことから、同じ場所での炉の作り替えや重複が行われたと考えられる。石囲炉に使用された礫には、径40cmにも及ぶ大型石棒片も確認された。土器敷きに使用された土器片には後期中葉八王子式の深鉢片が含まれていた。

Bb区西端では、竪穴建物跡が4棟重複した状況が確認された。先行する2402SIと次の2338SIは隅丸方形プラン、次段階の2400SI円形プラン、最も後出の1406SIは不定形である。いすれの竪穴建物跡も南西端にある地山の巨礫に制約を受けている。いずれも石囲炉跡を主体としているものの、2400SIの炉跡と1406SIの炉跡とは重複関係が確認された。(2346SLの上下)。

このように、竪穴建物跡は、繰り返し同じ場所が利用されたようで、上下に複数棟が重なった状態となることから、掘り方のみならず、炉跡の重複例もいくつか認められたことは、多いに注目されよう。

掘立柱建物跡と柱列　Bb区2403SBは、梁間2.6mほどの１間×2間の掘立柱建物跡である。ピットの径は50cm弱、深さも50cmを測る。Cb区4228SBは、梁間5mほどの掘立柱建物跡の可能性はあるものの、関連するピットを確認することはではきなかった。Cb区北西端では、径1mほどのピット2基からなる柱列を検出した(4302SA)。特に、それを構成する4230SPの柱痕内からは中期後半の深鉢土器片がまとまって出土した。

袋状土坑　断面袋状を特徴とする土坑群が、Ba区およびBb区とCb区の境付近、Cb区北西端などの特定の場所で複数基がまとまって見つかっている。

Ba区では山側と川側で見つかっている。川側では、812SKや813SKでは後期初頭の遺物がまとまって出土した。特に、813SKでは、遺構底面から後期初頭の鉢一個体が横位で出土した。

Cb区北西端の3639SKおよび3697SKでは、埋土中で植物種子が散在していた様子を確認した。種子は長軸1cm程度と比較的小型の種類である。

Bb区とCb区の境付近では、2258SKと4298SKから、多量の土器片が出土した。特に2258SKからは後期初頭の土器片がまとまって出土した。

土器埋設遺構　炉体土器以外の土器埋設遺構喉期は５基存在するが、底部に小穿孔あるいは欠損させている場合が多い。Cb区北東部で見つかった4263SKは4240SIの範囲南端に当たり、4240SI中の遺構(埋甕)としても考えられうる。しかし、4263SKはより上面からの掘り込みが考えられるもので、周囲の削平などを考慮した場合、4240SIあるいはその上位に存在したであろう竪穴建物に伴う埋甕の可能性が考えられる。

Bc区945SKは後期初頭の土器埋設遺構である。上位に胴部上半から下半の土器片が、下位に傾斜を違える状態で底部片が出土した。

集石遺構　土坑内に礫が集められている集石遺構は10基確認された。礫が土坑掘り方に投棄された状態のものがある一方で、Bb区2026SKのように被熱礫が立位状態で検出されるものや、同区1238SKのように塚状に重ねられているものもある。集石遺構は、掘立柱建物跡

2403SB南西側などの特定範囲にまとまりが認められる。

石棒および立石　大型石棒および棒状礫が、立位状態で出土した遺構が４基確認された。いずれの石棒・棒状礫も被熱していた。、土層断面を確認したところ、ピットの柱痕部分の中位から上位に埋設されており、ピット下位から据えられているものは認められなかった。

このうち、大型石棒が立てられていた2220SKは、上面で検出された集石1194SS・1195SS範囲の南端に当たり、これらとの関連も考えられるかもしれない。この石棒は埋設前にはすでに敲打により切断されたものと考えられる。

Cb区の4300SKは炉跡4255SLに付属するものと考えられる。この周囲では炉跡の可能性のある浅い落ち込みの角に、ピット状の落ち込みが見つかっており、炉跡脇に立てられたものの可能性もあろうか。

土器棺墓　Bc区943SZは、晩期中葉に属する土器棺墓で、棺身はやや甕形を呈する深鉢を立位埋設し、口縁側には別個体の深鉢口縁部が天地逆に埋設されていた。上の土器は口縁から10cm程度しか残存していないものの、後世の削平を考慮すると、少なくとも胴部中位まではあったかもしれない。棺内には、深鉢底部が二個体、正位で上下に存在していた。そのうちより下位から出土したものは縄文時代後期の深鉢の底部であり、何かの意図をもって土器棺埋設時に入れられたものと考えられる。

Ba区681SZ は、弥生時代前期の土器棺墓で、棺身は横位埋設した大型壺で、半分欠損させた口縁部付近を中心に、深鉢の大型破片で包み込むように蓋をしたものである。棺身の壺には胴部に小穿孔が施されていた。この部分は横位埋設状態の上側に当たる。壺の内部には、埋設時の底面側を中心に、炭化物の付着が激しく認められた。掘り方底面には礫が置かれており、棺の埋設時に安定させたようである。

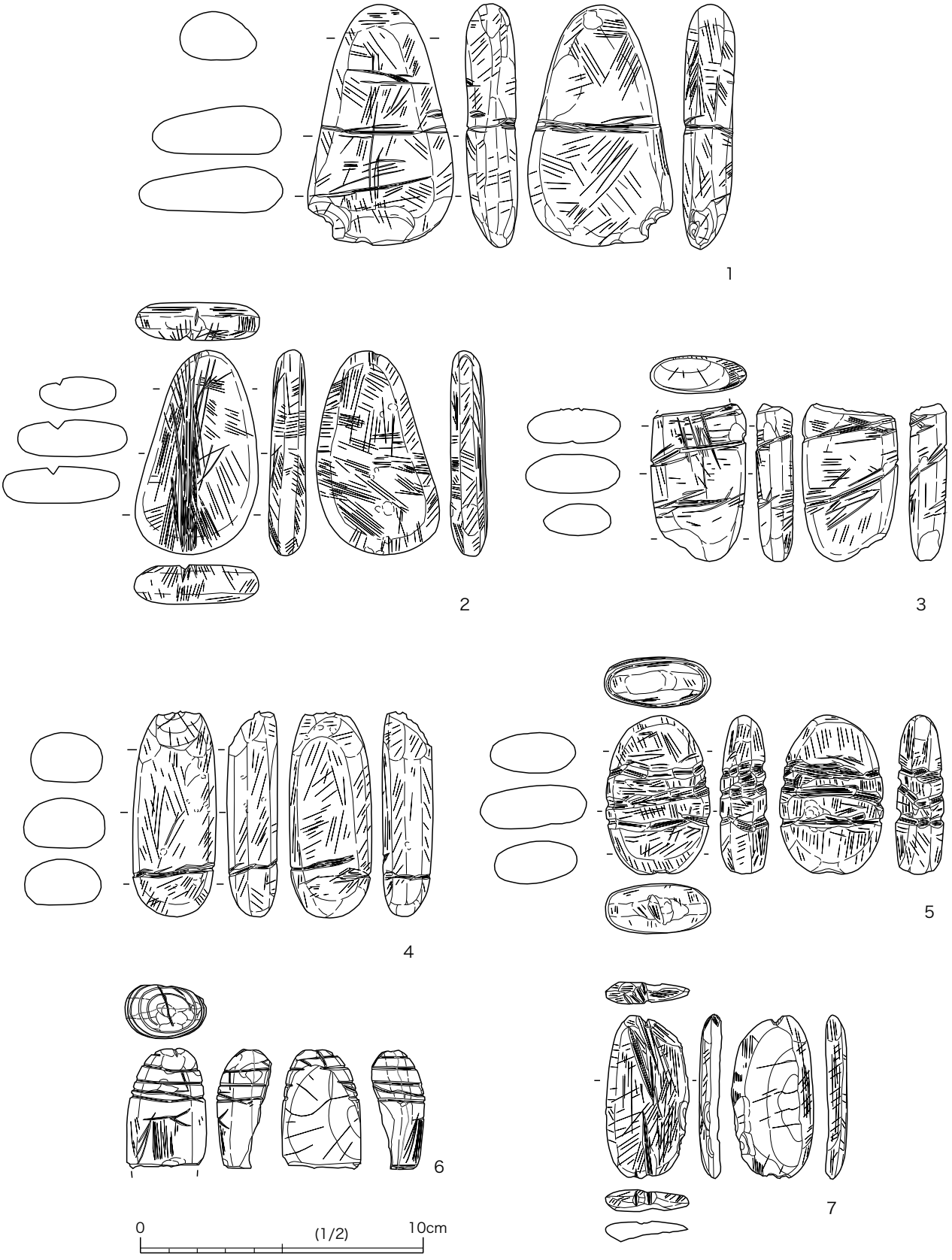
出土遺物　出土した土器には、縄文時代早期・中期・後期・晩期、そして弥生時代前期のものが確認された。その中でも、特に後期初頭から晩期前半の遺物が多く、器種としては、深鉢・浅鉢・注口土器がある。晩期では大洞系土器や橿原文様を有する浅鉢などが出土している。土製品では土偶の胴部片や手足部分が出土しているが、極めて少ない。

石器には、石鏃・石錐・スクレイパー・打製石斧・刃器・礫器・磨製石斧・打欠石錘・切目石錘・有溝石錘・磨石敲石類・石皿台石類・石鋸（擦切具）が出土した。この調査に限って言えば、石鏃を中心とする小型剥片石器類の出土が少なく、表層に集中しているようである。打製石器としては打製石斧や礫器などの大型の石器に対応する安山岩が多量に出土しており、それに由来する原石・石核・剥片が遺跡全体で見つかった。磨製石斧については、敲打（製作）途上のものも出土ている。いわゆる石錘としては有溝石錘が10点以上とまとまった出土をみた。今回の調査で、凝灰質砂岩製の擦切具の出土を見た。愛知県下では、豊田市馬の平遺跡で1点採集されており、本例が2例目になる。

また、石製品には、石棒石刀類・石冠・岩偶岩版類・独鈷石があり、なかでも線刻礫を含む岩偶岩版類は今回の調査で6点確認された。奥三河郷土館に所蔵されている2点を合わせると計8点となり、１遺跡での岩偶岩版類の出土量は県内で最多となる。

まとめ　今回、笹平遺跡（集落）のすべてを調査したことにより、巨石「笹平岩」を挟み、地形に沿って展開した縄文時代の集落のあり方を解明する良好な資料を得ることができた。遺跡の規模や内容から、設楽山間部の縄文時代後晩期を代表する遺跡の調査事例となったといえよう。

（川添和暁）



1～6：岩偶岩版類（泥質凝灰岩）、7：線刻礫？（凝灰質砂岩）

図４　笹平遺跡出土遺物１

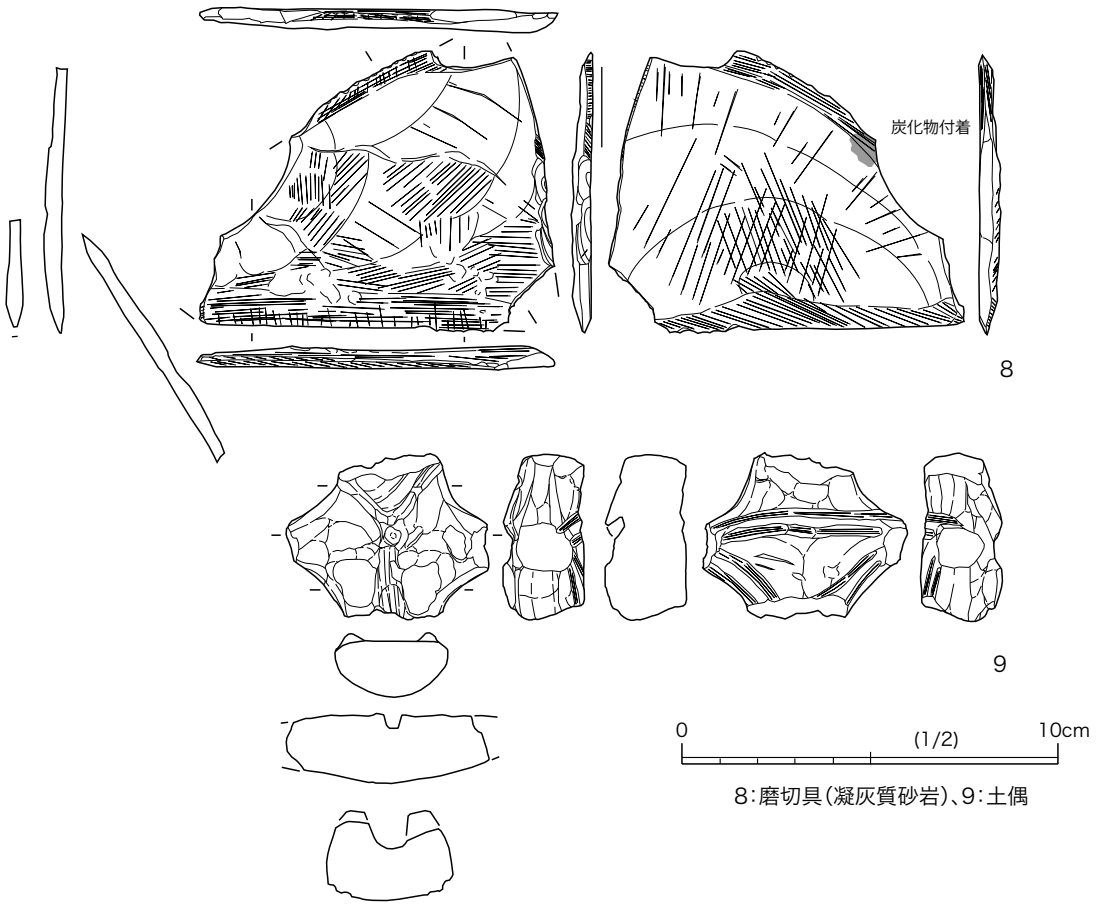


図 5　笹平遺跡出土遺物 2



笹平遺跡出土遺物（大型石棒・石棒石刀類・独鈷石・石冠・岩偶岩版類）



調査区遠景（西より）



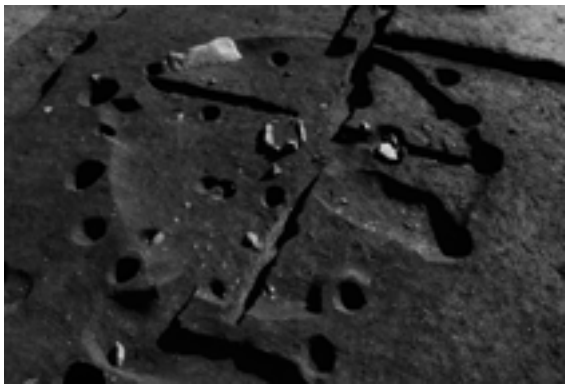
調査区全景（北より）



Cb 区 3893SI（北より）



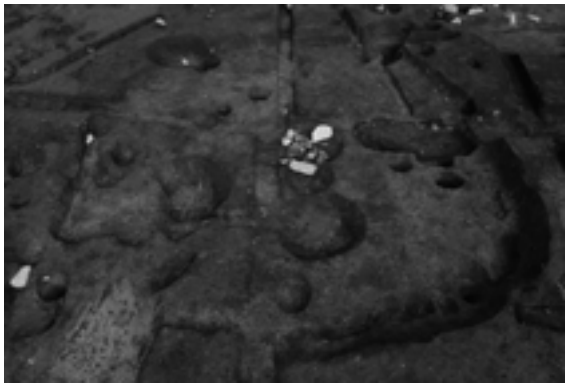
Cb 区 4230SP 土層断面（南より）



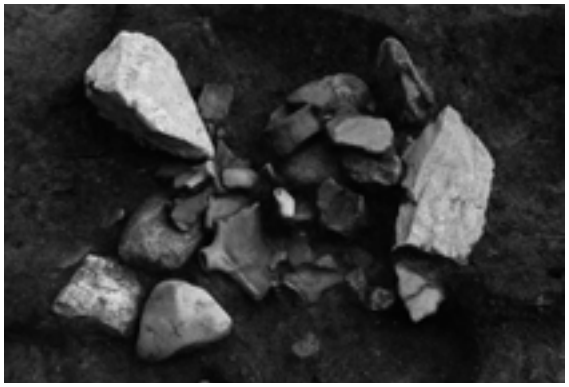
Cb 区 3947SI（北より）



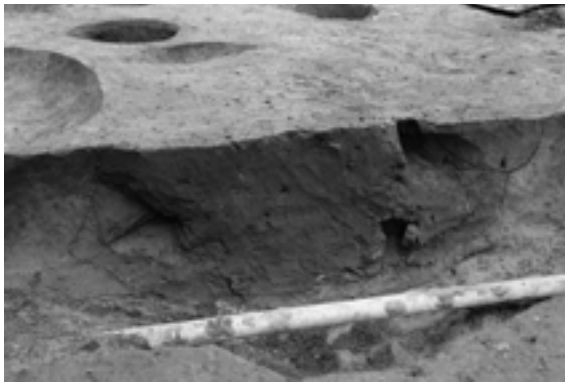
Bb 区 2258SK 遺物出土状況（北より）



Bb 区 2216SI（東より）



Bb 区 2216SI 炉跡（2319SL）遺物出土状況（北より）



Cb 区 3697SK 土層断面（東より）



Cb 区 4255SL（南より）



Bb 区 2220SK 土層断面（南より）



Bc 区 2278SK 土層断面（南より）



Cb 区 4263SK 土層断面（東より）



Cb 区 4129SK 土層断面（東より）



Bb 区 1238SK（西より）



Bc 区 943SZ（南より）



Ba 区 681SZ（南より）

川向東貝津遺跡（かわむきひがしがいつ）



調査地点（1/2.5万「田口」）

所在地　北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度6分26秒 東経137度33分54秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　平成27年5月～平成27年11月

調査面積　2,740㎡

担当者　樋上 昇・鈴木恵介

調査の経過　発掘調査は、設楽ダムの建設工事に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業としておこなった。

立地と環境　川向東貝津遺跡は豊川の支流、境川右岸の河岸段丘上に立地する。遺構検出面での標高は374～376mを測り、東から西に向かって緩やかに傾斜している。近世以降には、石垣で区切られた5段の平坦面からなる棚田に改変されており、さらに1950年代には水田が放棄されて杉の植林がおこなわれている。

調査の概要　この遺跡は平成22年度に今回の調査区の北側で発掘調査が実施されており、縄文時代後期の埋甕や集石土坑などを確認している。

今年度は、5段からなる平場の西側3段分を15A区、東側の2段分を15B区として発掘調査を実施した。その結果、15A区では、上面遺構として縄文時代中期の竪穴建物跡と集石土坑、縄文時代後期の竪穴建物跡と埋甕、所属時期不明の陥し穴などを確認した。また、下面遺構として、後期旧石器時代と縄文時代草創期の石器集中区を検出している。

いっぽう15B区では、丘陵上部からの度重なる土石流による地形の著しい改変により、土坑数基のほかにめだった遺構の確認はできなかった。

上面遺構　縄文時代中期の遺構群は、おおむね15A区西辺に集中している。竪穴建物跡は4棟（001・002・003・114SI）検出した。

001SIは一辺約3mの隅丸方形を呈し、中央に石囲炉を有する焼失住居で、炭化材が良好に遺存していた。

002SIは一辺約4mを測る隅丸方形で、中央の石囲炉がきわめて良好な状況で検出された。また、床面に配置された平石のうちのひとつの下部からは、ほぼ完形の埋甕が出土した。

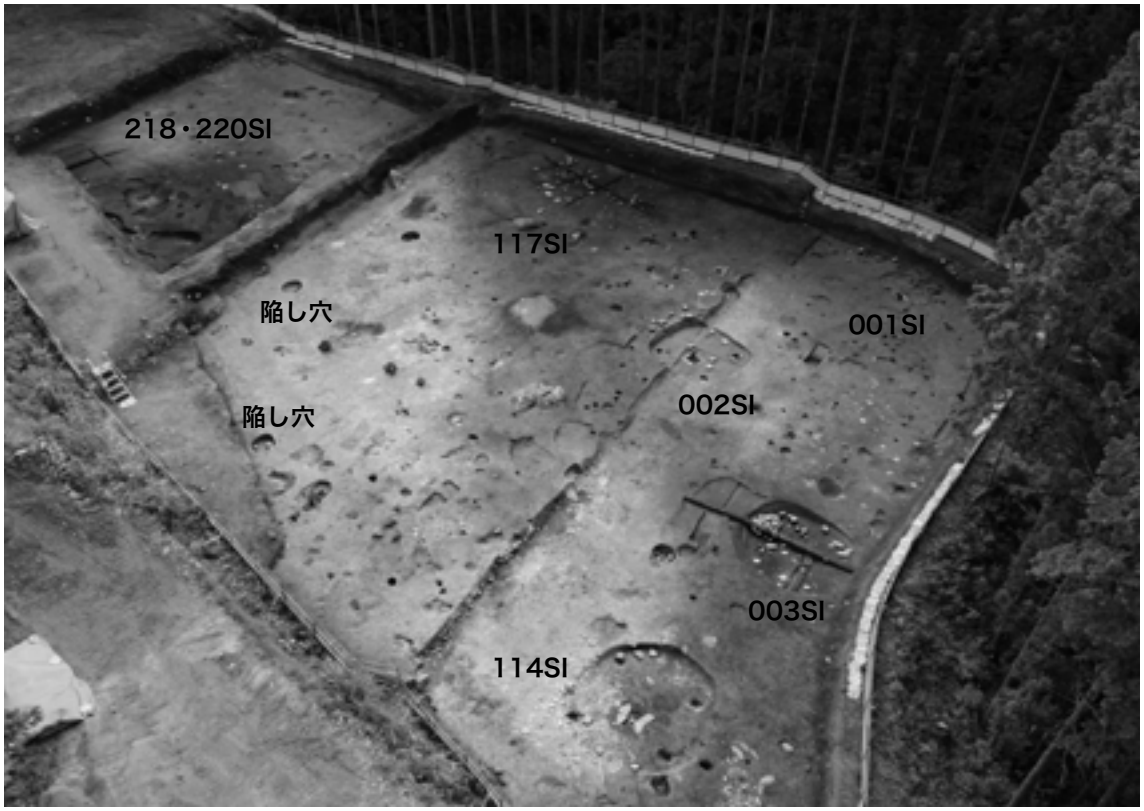
003SIは長軸約5mのやや五角形に近い平面プランをもち、中央の石囲炉も五角形を呈する。この竪穴建物跡には、住居廃絶後に大量の人頭大の石が投げ込まれていた。

114SIは直径約5mを測る円形プラン。かつての境川の旧河床にあたる円礫層を掘削して築かれていた。中央の石囲炉は幾度かの補修がなされている。

集石土坑には焼け石をともなうものが多く、屋外炉として利用された可能性が高い。

縄文時代後期の遺構群は西から2段目と3段目の平場に展開する。竪穴建物跡は177・218・220SIの3棟だが、いずれも遺存状況は不良で、炉跡も判然としない。また、縄文時代中期の竪穴建物跡である002SIの埋土上層からも縄文時代後期の埋甕が確認されていることから、すでに後世の造成によって削平された竪穴建物跡が数棟存在していたと考えられる。

そのほか、所属時期不明の陥し穴は西から2段目の平場で2基検出している。（樋上　昇）



15A区全景（北西より）



001SI全景（西より）



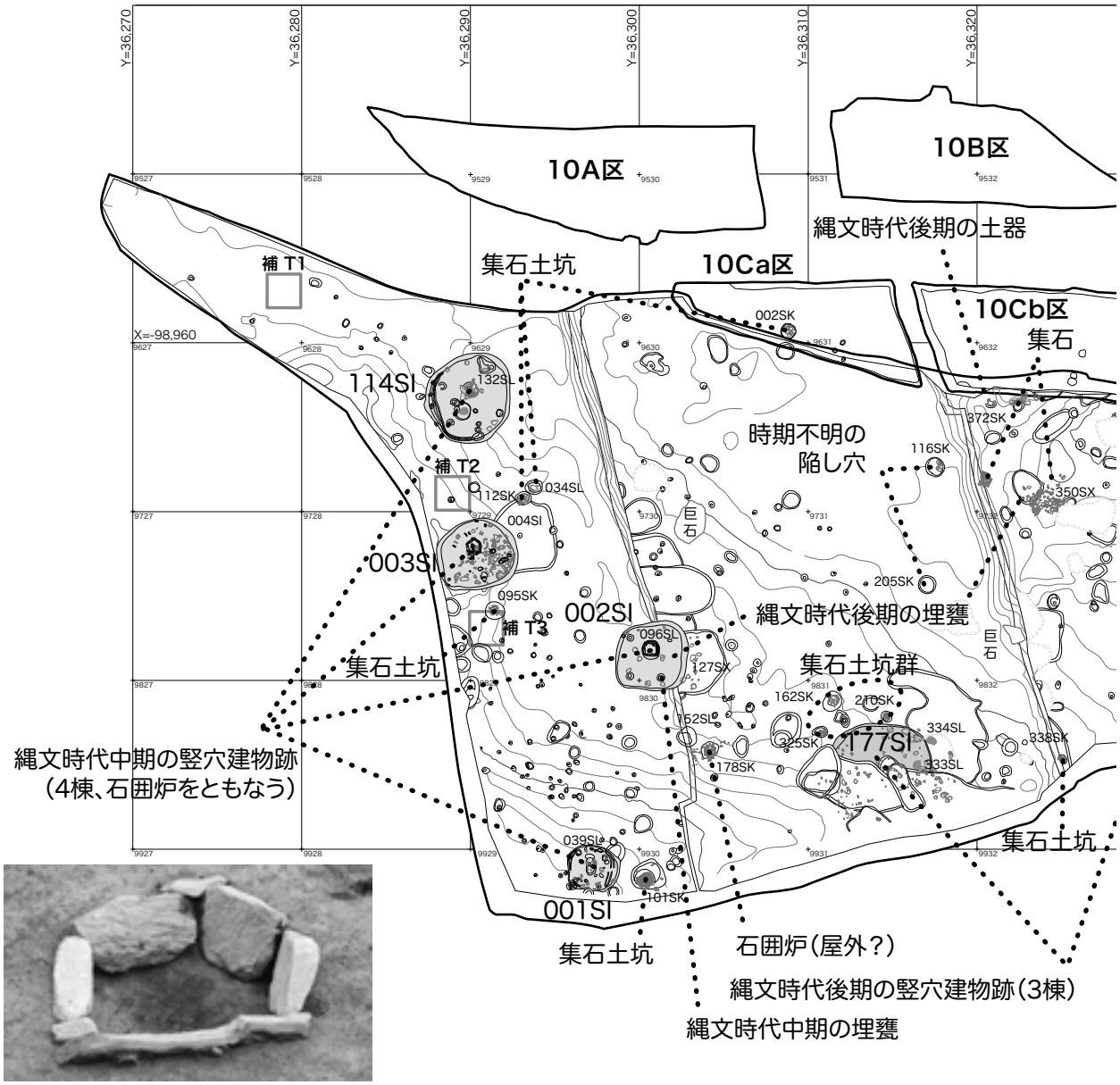
002SI全景（西より）



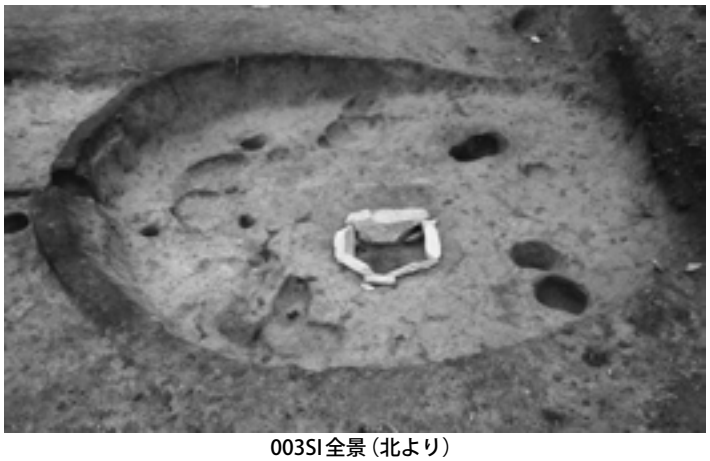
002SI埋甕（西より）



002SI石囲炉（西より）



003SI石囲炉（南より）



003SI全景（北より）



縄文後期埋甕（東より）

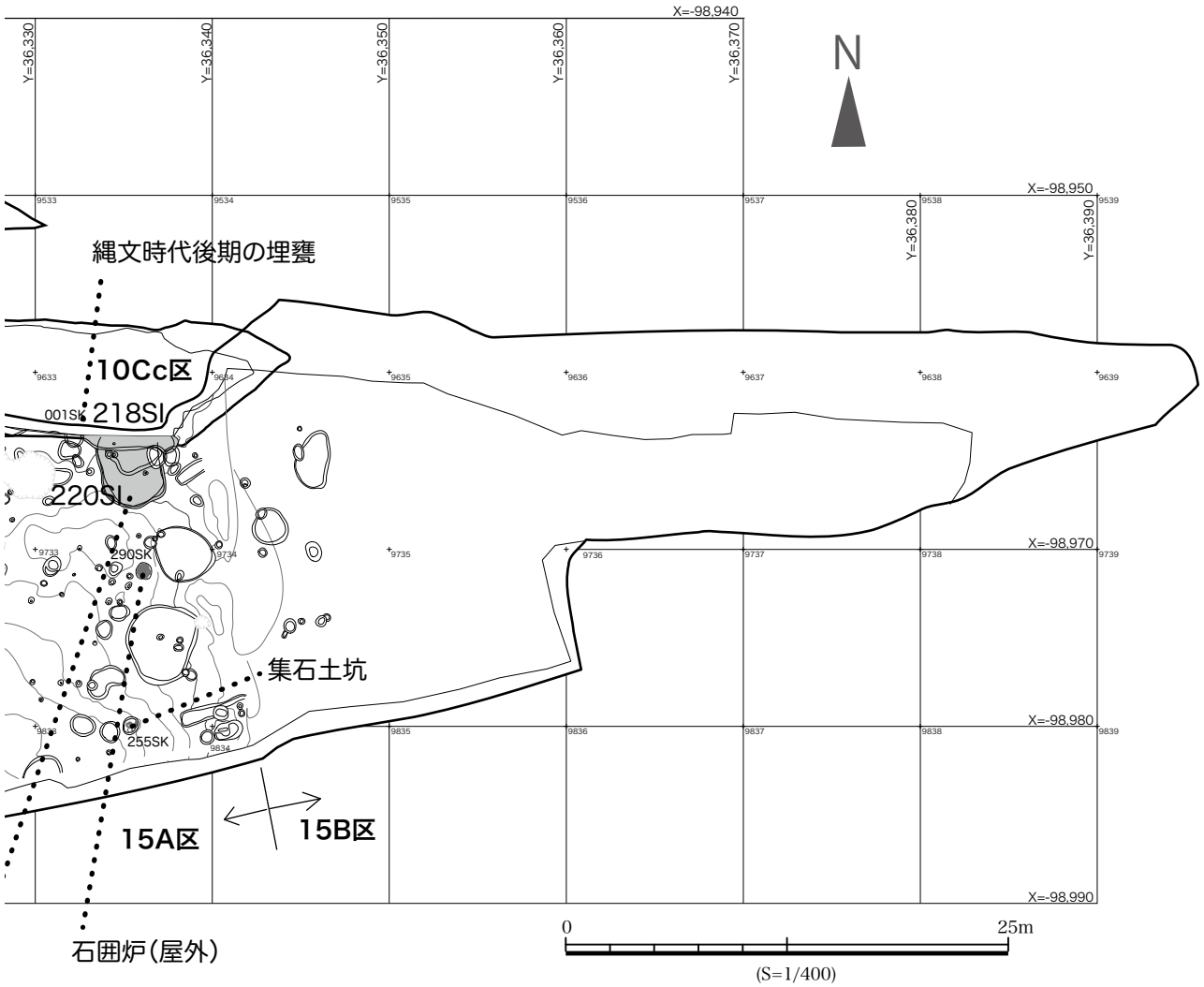


図1 上面遺構全体図（1:400）



114S石囲炉（北より）



114SI全景（東より）

下面遺構　下面補足調査は、川向東貝津遺跡の本調査中に、縄文時代中期の遺構検出面となっている黄褐色シルト層中より石器が多数検出されている状況を踏まえて、下層の縄文時代中期以前にさかのぼる遺構・遺物の存在を明らかにするために行われたものである。

結果として多数の安山岩系の石器・石材、白色風化石材の石器・石材を確認した。遺構は確認できていない。調査範囲は、2m×2mのトレンチを3カ所、計6㎡。検出面以下での石器の出土は、当初15A区に限られていたため、15A区内での本調査時に遺物の出土が特に多く見られた箇所に設定した。

補TT1では検出面直下で多数の石器・石材を検出し、そのほとんどが安山岩系石材である。補TT1の周囲には旧河床の礫層が多数露出し、補TT1出土の石器・石材群はこの河川堆積直上に位置している。

補TT2は他の2カ所に比べると石器の出土数は少量であったが、さらに掘削した結果、下位にいたっても白色風化石材の石器が出土した。

補TT3では検出面から上層は黒曜石が検出され、中位～下位にいたると黒曜石が姿を消し、白色風化石材と安山岩系石材が占める状況も判明した。このことから、石器の分布は上位と下位では異なった様相を示すものと思われる。

愛知学院大学の白石浩之教授から複数の文化層が存在する可能性が指摘された。さらに補TT1での河川堆積直上での石器・石材出土については、旧河床礫層への混入した形での検出も予見されていた。

以上の補足調査の結果と、この後に行われた範囲確認調査の結果を併せると、石器の分布は層位や位置で偏在する傾向はあるものの、広範囲にわたることを窺わせる。そのため、石器・石材の分布は、15A区の西半部に広く分布していると考えられる。（鈴木 恵介）



補TT1（南西より）



補TT1石器・石材集中部（南西より）



補TT2（北西より）



補TT3（北西より）

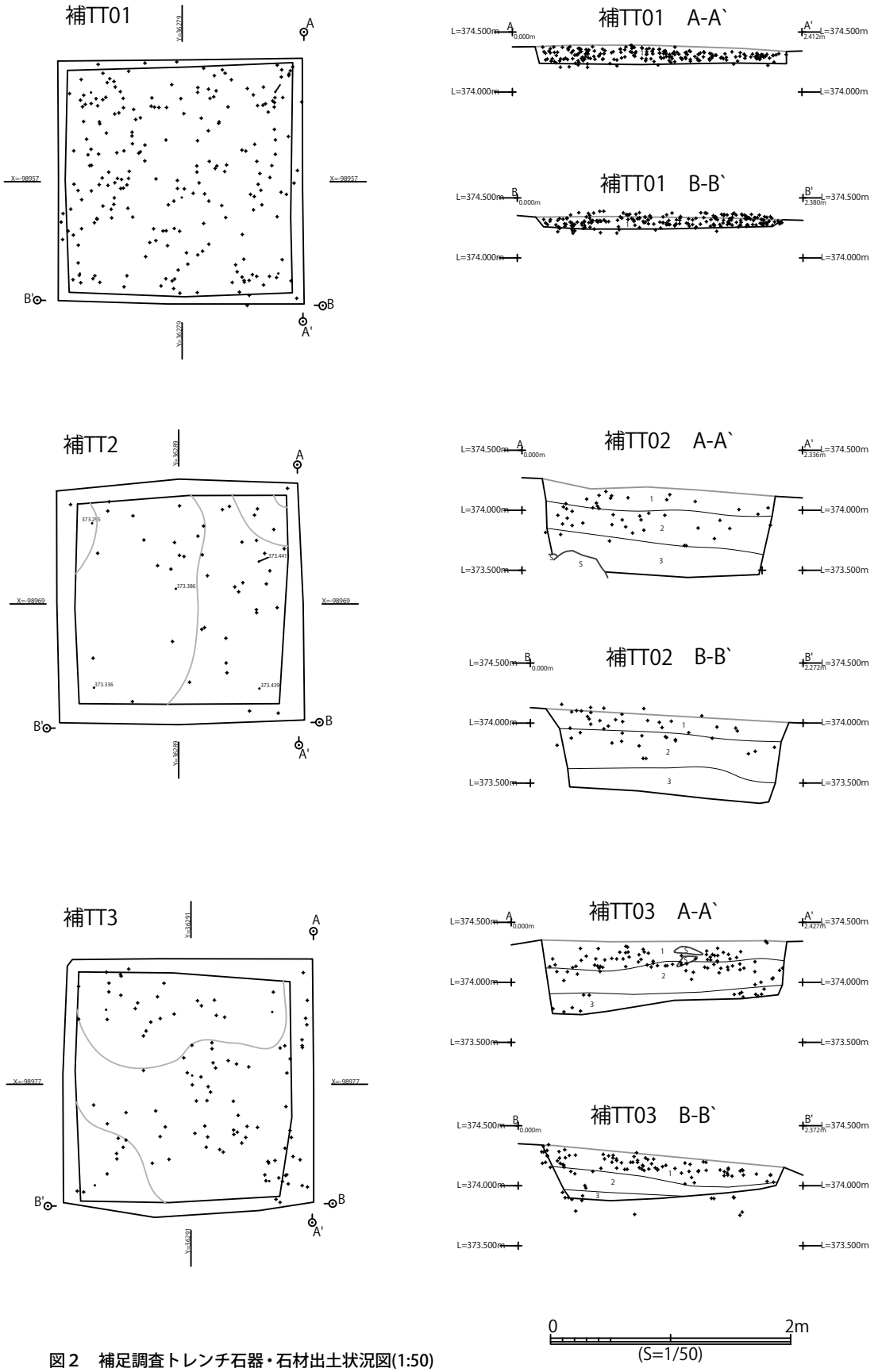
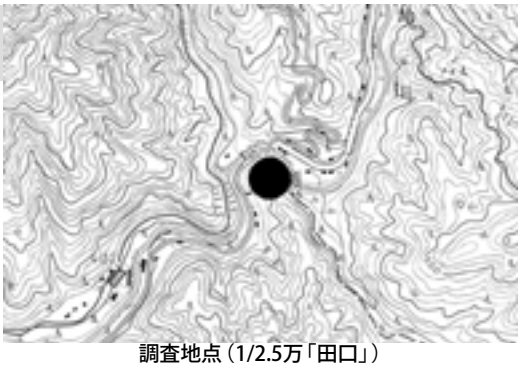


図２　補足調査トレンチ石器・石材出土状況図(1:50)

滝瀬（たきせ）遺跡


調査地点（1/2.5万「田口」）

所在地　北設楽郡設楽町大字八ツ橋字タキセ
（北緯35度07分10秒　東経137度34分55秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　平成27年８月24日～平成27年11月27日

調査面積　1,470㎡

担当者　樋上昇・早野浩二

調査の経過　発掘調査は設楽ダム建設事業に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。遺跡は縄文時代、室町（戦国）時代の遺物散布地として周知される遺跡で、平成27年度は境川に面した段丘上に1,470㎡の発掘調査区を設定して実施した。

立地と環境　滝瀬遺跡は境川右岸の河岸段丘上から山麓の丘陵斜面に立地する。なお、遺跡には江戸時代の伊那街道が通る。

調査の概要　調査区のほぼ中央には巨礫を含む段丘礫が露出し、その下位付近において縄文時代早期から前期と思われる集石遺構群、同中期から後期と思われる竪穴建物、同後期の土坑を検出した。

縄文時代早期から中期前半と思われる集石遺構はその可能性があるものを含めて９基を確認した。遺構の平面形は径0.5～1.5mの円形または楕円形で、明確な土坑状の掘り込みを伴って検出されるものと、掘り込みが浅く曖昧なものがある。集積された礫は拳大程度の大きさが主で、被熱したものが多い。

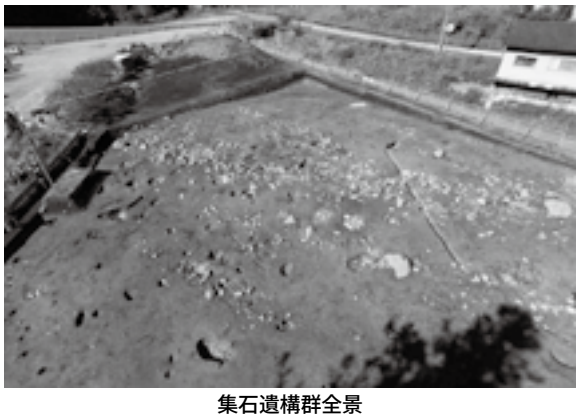
140SL・080SLは・120SL・050SLは土坑内に被熱した礫が充填された状態で検出された。いずれも充填された礫の直下の土坑の底面には濃密な炭化物層を確認した。022SKもこれらと同様であった可能性が高い。120SLは土坑が一定程度埋没した段階で、さらに礫が集積されていた。礫はやや小振りで、疎らである。土坑の再利用（または重複）と考えられる。150SLは明確な掘り込みが検出されず、被熱した礫が散在した状態で検出された。070SLは基盤層中の巨円礫の周囲、090SLは散在する巨礫中に被熱した礫が集積された状態で検出された。040SLは浅い掘り込みの周縁に被熱した礫が集積し、中央には縄文時代前期から中期前半の深鉢が逆位で埋設されていた。040SLを除く集石遺構から遺物は出土していないが、遺跡からは少量ながら、縄文時代早期中葉の押型文土器も出土していることから、これらの集石遺構は縄文時代早期から中期前半のいずれかに帰属する可能性が高いと推定される。

竪穴建物060SIは検出面ですでに床面と石囲炉が露出した状態で検出された。平面形は残存する部分から、径3.0m前後の円形と推定される。遺構から遺物は出土していないが中期後半から後期前葉と推定される。

竪穴建物の付近においては貯蔵穴と推定される土坑180SKが検出された。土坑内からは縄文時代後期の深鉢が良好な状態で出土した。その他、包含層中からは縄文時代後期前葉を主体とする遺物が比較的多く出土している。出土した縄文土器としては、深鉢、注口土器等、石器としては、打製石斧、磨製石斧、切目石錘、礫石錘、石皿等がある。（早野浩二）



滝瀬遺跡15区遺構配置図（1:400）



集石遺構群全景



集石遺構080SL検出状況

大栗（おおぐり）遺跡

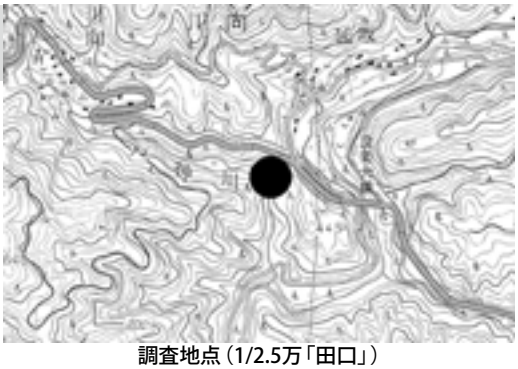
所在地　北設楽郡設楽町川向大栗
（北緯35度06分40秒 東経137度33分52秒）

調査理由　設楽ダム

調査期間　平成27年７月２日～平成27年９月30日

調査面積　2,360㎡

担当者　樋上昇・早野浩二



調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　発掘調査は設楽ダム建設事業に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。遺跡は縄文時代、平安時代、室町・戦国時代の遺物散布地として周知される遺跡で、平成27年度は平成26年度の範囲確認調査の結果を受けて、2,360㎡の発掘調査を実施した。

立地と環境　大栗遺跡は戸神川左岸沿いの南西向きの緩斜面に立地する。南東の丘陵上には縄文時代の遺物散布地として周知される大畑遺跡が分布する。

調査の概要　今年度の発掘調査においては、戸神川に面した緩斜面において少数の遺構と遺物の包含を確認した。また、調査区北西部分の丘陵斜面を造成した平坦面において戦国時代以降の遺構群を確認した。

戸神川に面した緩斜面は巨礫を含む礫層が広範囲に露出する。確認された遺構はごく少ないが、礫を多く含む土坑002SK・003SKは縄文時代の集石遺構の可能性がある。また、礫層を被覆する堆積層中には、熔結凝灰岩、チャート、黒曜石製の剥片を主体とする遺物の包含を確認した。周辺からは、縄文時代早期前半の押型文土器、縄文時代晩期以降の有茎石鏃、弥生時代前期の条痕文土器等も出土している。その他、灰釉陶器が出土した土坑019SKを確認した。

調査区北西部分の平坦面においては、戦国時代以降の遺構群を確認した。土坑043SKは大窯期前半の天目茶碗が出土したことから、戦国時代の遺構と考えられる。平坦面の整地層中からは、志野菊皿が出土し、整地後に掘削された土坑051SK・055SKには桶が埋設されていた。その他、調査の過程で、古墳時代前・中期の土師器壷、室町時代の古瀬戸四耳壷が出土した。（早野浩二）



大栗遺跡15Ａ区（南西部）全景



北西部の戦国・江戸時代遺構群



大栗遺跡15区遺構配置図（1:500）

大名倉丸山遺跡（おおなぐらまるやま）

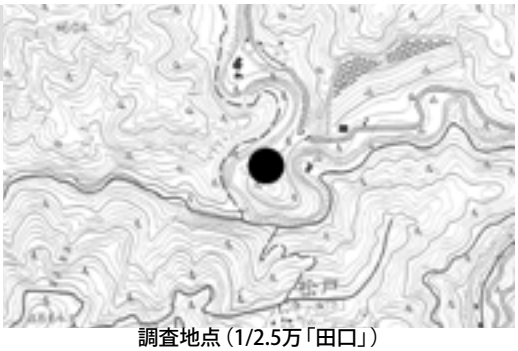
所　在　地　北設楽郡設楽町大字松戸字ワカドチ
（北緯35度5分59秒 東経137度33分7秒）

調 査 理 由　設楽ダム

調 査 期 間　平成27年10月～平成27年11月

調 査 面 積　450㎡

担　当　者　樋上 昇・武部真木

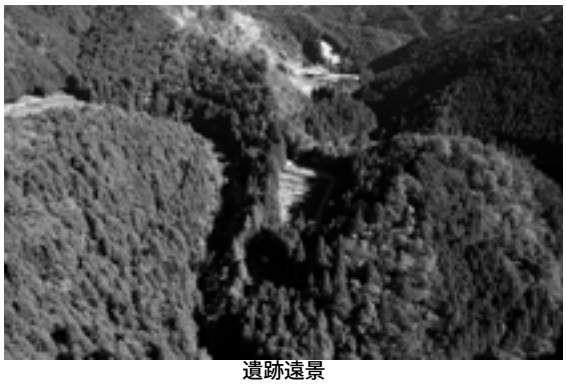


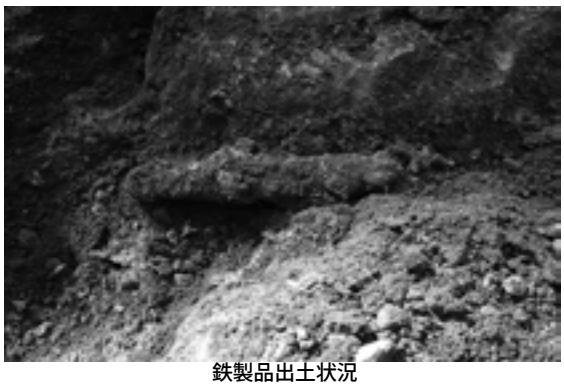
調査地点（1/2.5万「田口」）

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連事業として、国土交通省から愛知県教育委員会の委託を受けて平成27年10月から11月にかけて実施した。調査面積は450㎡である。

立地と環境　遺跡は、豊川水系寒狭川左岸の標高約400mの河岸段丘上に立地する。周辺で流路は大きく蛇行し、ちょうど川に囲まれた地形となっている。調査地点現況は川に向かって傾斜する西向き斜面にあり、造成された旧耕作地であったものが植林となっている。これまでに愛知県教育委員会による詳細遺跡分布調査と愛知県埋蔵文化財センターによる範囲確認調査が行われ、鍛冶滓が採取されていた。

調査の概要と まとめ　今回の調査では、複数の小土坑を検出したほか、土器小片と金属製品１点、事前調査と同様に鍛冶滓を採取した。金属製品の種類は不明であるが、処理前で直径4～5cm、長さ20cm程度の棒状を呈する。遺構・遺物ともに時期を判断する材料に乏しいが、地山から露出している岩盤、大型礫群の一部には人為的な加工痕が認められることなどから、耕作地整備の際の石垣石材の加工等に関連して、工具の修繕など鍛冶作業が付近で行われた可能性が考えられる。（武部真木）


遺跡遠景


鉄製品出土状況


完掘状況


鍛冶滓出土状況

大名倉遺跡ほか14遺跡（範囲確認）

所　在　地　北設楽郡設楽町

調 査 理 由　設楽ダム
調 査 期 間　平成27年5月～12月
調 査 面 積　1,500㎡
担　当　者　酒井俊彦・川添和暁・鈴木恵介

各遺跡の位置は平成27年度調査遺跡位置図を参照

大名倉遺跡（大名倉字大名倉北緯35度06分35秒 東経137度32分43秒）・**日掛遺跡**（字日掛北緯35度06分29秒 東経137度32分52秒）・**西地・東地遺跡**（字西地・東地北緯35度06分36秒 東経137度32分44秒）・**ハラビ平遺跡**（字ハラビ平北緯35度06分25秒 東経137度33分1秒）・**大名倉丸山遺跡**（字丸山北緯35度06分02秒 東経137度33分11秒）・**上戸神遺跡**（大字川向字上戸神北緯35度06分50秒 東経137度33分25秒）・**大栗遺跡**（字大栗北緯35度06分40秒 東経137度33分52秒）・**万瀬遺跡**（字万瀬北緯35度06分41秒 東経137度33分53秒）・**大畑遺跡**（字大畑北緯35度06分34秒 東経137度33分58秒）・**向橋遺跡**（大字八つ橋字向橋北緯35度07分49秒 東経137度35分39秒）・**永江沢遺跡**（字永江沢北緯35度07分33秒 東経137度35分12秒）・**添沢遺跡**（大字田口字添沢北緯35度06分22秒 東経137度34分23秒）・**笹平遺跡**（大字小松字笹平北緯35度06分46秒 東経137度34分03秒）・**川向東貝津遺跡**（大字川向字東貝津北緯35度06分26秒 東経137度33分52秒）

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連の事前調査として国土交通省から愛知県教育委員会を通じて当センターが委託を受けて実施した。今年度は 14 遺跡で遺跡範囲確認調査を実施した。調査は、各遺跡の調査対象部分に平面 1m×2m を基本とする試掘坑（テスト・トレンチ）を遺構基盤面または地山面まで掘りさげ、遺構・遺物の有無と堆積層序を確認する方法をとった。トレンチ数は 3 ヶ所（笹平遺跡）～ 182 ヶ所（大畑遺跡）、調査面積は 6 ㎡（笹平遺跡）～ 446 ㎡（大畑遺跡）、総計はトレンチ数 539 ヶ所、調査面積 1500 ㎡である。

立地と環境　遺跡は豊川上流域、三河山地の北設楽郡設楽町内に所在する。調査地区として豊川支流の境川流域に笹平遺跡、大畑遺跡、大栗遺跡、万瀬遺跡、川向東貝津遺跡、添沢遺跡、向橋遺跡、永江沢遺跡、上戸神遺跡、同じく寒狭川流域に大名倉遺跡、西地・東地遺跡、日掛遺跡、ハラビ平遺跡、大名倉丸山遺跡がある。遺跡は標高 360 ～ 460m の範囲に位置する。遺跡の位置する地形については、大名倉遺跡・笹平遺跡・川向東貝津遺跡は豊川支流の河岸段丘上、他は山地斜面または山地上平坦部（大畑遺跡）に立地する。（酒井俊彦）

調査概要１　ここでは、5 月から 10 月までに実施した調査について報告する。調査の内訳は、大名倉遺跡 38 カ所（88 ㎡）、日掛遺跡 27 カ所（54 ㎡）、西地・東地遺跡 5 カ所（10 ㎡）、大栗遺跡 19 カ所（170 ㎡）、万瀬遺跡 4 カ所（16 ㎡）、大畑遺跡 182 カ所（446 ㎡）である。また、本調査に伴い、遺跡の範囲が広がる可能性が生じたため、9 月に笹平遺跡 3 カ所（6 ㎡）を行った。

大名倉遺跡　大名倉遺跡は、大名倉地区の寒狭川右岸（西岸）に位置する。本遺跡は、下谷遺跡の名称でも知られており、これまでも多量の遺物が表面採集されている（名倉村 1951『三州名倉』、鈴木冨美夫ほか 1968『北設楽郡史 原始 - 中世』北設楽郡史編纂委員会）。1968 年 3 月には早稲田大学による発掘調査が行われており、近年報告書も刊行された（平野吾郎編 2004『下谷遺跡』北設楽縄文文化研究会）。現在は、町指定史跡となっている。

設楽ダム関連工事に伴い、2007・2008・2013・2014 年に愛知県埋蔵文化財センターにより範囲確認調査が行われている。これらに続き、今年度は、南北に細長い遺跡西端の山際が確認対象地域となった。

確認対象地域南端では、谷地形内の土石流堆積あるいは近代以降の耕作土が認められるのみであり、この状況は町道を挟んで東側（低位方向）でも同様である（TT01 ～ 04・06・07・29 ～ 36）。今年度の確認範囲外の南側には、現況でも谷地形を確認できるが、その北側への広がりに当たるのであろう。TT05 では表土直下で岩盤を確認した。東側からの丘陵末端に位置しており、この谷地形の範囲が推測される。

調査区北西端は現況でも流水が著しい地点であり、ここでも谷地形内の土石流堆積が確認できている（TT13・14）。これら二つの谷地形は、遺跡の範囲を画するものと推測される。

町道の西側（高位方向）では、耕作土の下にシルト質の地山を確認した。遺物の出土は耕作土中であるが、TT12 では戦国期の土師器鍋が出土した。

今回の確認対象の北東側（町道より東側の区域）では、縄文時代を中心とする遺構・遺物を確認した。特に、TT16 で確認できた法量の大きな土坑は竪穴建物跡の可能性もあり、良好な遺跡の保存が推定される。周囲からは縄文時代早期・中期の土器片が出土していることから、当該時期の活動痕跡が残されている可能性があろう。

日掛遺跡

日掛遺跡は寒狭川の西岸、大名倉遺跡の南東側に位置する。現況は、北西側から南東側に向かって傾斜をしており、これが寒狭川に張り出す３段の平坦面となっている。遺跡範囲とされている東西両端には現況でも寒狭川に向かって流れる沢がある。遺跡範囲内の東側にある高まりは、現在は東海自然歩道となっている路の開削によって独立状になったもので、本来は南西から伸びる尾根末端に当たるものである。

遺跡全体にわたり、旧河床の堆積および土石流堆積が認められた。最も良好な平場と想定された中央南側の平場も、盛土中から近代の陶器片が出土するなど形成時期は極めて新しく、急峻な旧地形を埋めて平場が造成されていたことが明らかとなった（TT24・25）。TT09 では、土石流堆積層の上で近世末の古銭（文久通宝）が出土したことから、TT09・11 付近の平場は近世末以降には存在していたようである。安定した層が確認できたのは、TT20・26・27 のみである。このラインは南から北に伸びる稜線に当たるものであるが、ここでも明確な遺構・遺物を確認できない結果となった。

西地・東地遺跡

西地・東地遺跡は、大名倉地区の寒狭川左岸（東岸）に位置する。本遺跡は、遺跡北西側（本来の西地遺跡側）を対象として、2014 年度に本調査が行われた。14B 区・14C 区とした町道を挟んだ両調査区では、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が良好に確認され、特に 14B 区では、石囲炉跡や土器敷炉跡をもつ竪穴建物跡・埋甕・袋状土坑など、縄文中期後半から後期初頭にかけての集落跡が見つかった。今年度の範囲確認対象地域は、遺跡範囲の南東端、寒狭川左岸（北岸）の段丘上である。当地は白鳥神社の跡地で、和鏡「水辺蘆双雀鏡」が出土した場所付近である。対象地域に TT01 から TT05 の５本のトレンチを設定した。

TT01・02 では、表層の耕作土や盛土下には河川堆積層が存在し、さらに下層には安定した堆積層を確認できたものの、この面からは明確な遺構は確認できなかった。TT01 では近世の遺物が出土しているが、上層の耕作土からのみである。TT03 では北側から

伸びる稜線末端の安定した堆積層が確認できたものの、遺構・遺物は確認できなかった。TT04 は旧河床景観で、TT05 はごく最近の盛土が厚く堆積している場所であった。

大栗遺跡

大栗遺跡は川向地区の遺跡で、境川に流れ込む戸神川の左岸（東岸）、擂鉢状の谷地形内に形成された緩斜面に立地する。大畑遺跡が位置する丘陵の下部、戸神川が東から南方向に屈曲する部分に位置しており、緩斜面の現況も平面形状が弧状を呈している。

本遺跡は、平成 26 年度に範囲調査が行われたものの、機材など調査体制の事情により、一部様相が把握しきれなかった。本年度は、より詳細な確認が必要となった遺跡中央部と、より深部まで確認が必要となった遺跡西部の調査を行うこととなった。なお、平成 27 年度現在、大栗遺跡の一部では本調査も行われている。

遺跡範囲の中央部で調査した、TT01 ～ 14 では、擂鉢状の傾斜を呈する TT01･TT02 で、遺構・遺物の確認はできなかったものの、緩傾斜となる地形の底部分では、遺構・遺物の存在が想定される。特に、TT13・14 では、地山様の堆積層が遺物包含層となっている可能性がある。７月現在行われている 2015 年度の本調査、A 区としている調査区南側では北東から南西方向への土石流堆積の塁重が確認されており、今回確認された石器を含む包含層は、この堆積層に由来するものの可能性もある。その形成時期が問題となろう。

一方、TT15 ～ 18 が調査された遺跡西端の谷地形部分では、明瞭な遺構・遺物が確認できなかった。TT15 ～ 17 では、現況とは異なる棚田様の水田が確認されたものの、時期は近代以降である。TT18 では、この棚田様の水田自体も確認できないほど、形成された堆積層自体は極めて新しい。TT18 付近の前年度の調査トレンチ（平成 26 年度 TT10）では、上層で弥生土器が出土したものの、二次堆積の可能性が極めて高い。

万瀬遺跡

万瀬遺跡は、大畑遺跡が立地する丘陵に沿って、境川が西側から南側さらにまた西側へと、流れが蛇行する場所にあたる。遺跡は、川向地区の境川右岸（西岸）の大きな谷地形内の緩斜面に位置しており、境川との比高差は、現況で 25m 以上である。本遺跡は平成 26 年度に本調査が行われた。本年度の万瀬遺跡範囲確認対象地域は、遺跡範囲とされる西端、県道小松・田口線の西側に作られた斜面中腹の平場である。

TT01 では土石流堆積層が厚く堆積している状況であった。TT02・03 では、耕作土や土石流堆積下からやや安定した黄褐色粘土質シルトが認められた。しかし、近代以降の遺物しか出土せず、検出された遺構様のものも近代以降のものと考えられる。TT04 も耕作土の下に比較的安定した堆積層見つかったものの、この上面では近代以降の遺物のみで、遺構状のものもこの時期以降のものと考えられる。

大畑遺跡

大畑遺跡は、川向地区の境川右岸（北岸）に位置する。当地は、崩落地形によって形成された南側に突き出した段丘上に立地しており、東および南側には境川が、西側には戸神川が流れそのまま境川へと合流する。この崩落地形の東側奥には万瀬遺跡が、西側には大栗遺跡が位置し、南側下段の緩傾斜面には川向東貝津遺跡が位置する。この段丘は、周囲との比高差が著しく高くなっており、東側では境川との比高差は約 46m、南側では川向東貝津遺跡が立地する緩傾斜面との比高差は約 70m である。

今回の範囲確認調査成果を、地区別に分けて総括する。

旧ゲートボール場北側

TT001 ～ 010・012 ～ 018・021 が当たる。当地の北端は、岩盤上に風成堆積層が確認されるのみで、遺構・遺物は認められなかった。南側の丘陵上位に向かっていくに従い、徐々に黄褐色粘土質シルトの堆積を確認することができた。しかし、そこでも遺構・

遺物は確認できないでいる。

旧ゲート
ボール場内　TT022・023・028 ～ 030・034 ～ 037・040 ～ 044・048・049・053・054・059・060・063・065・112・113 が当たる。当区域は、全面に渡って多量の盛り土により平坦面が形成されている。その中でも TT034・TT035・TT040 あたりは浅く、時期不詳の落ち込み（遺構か）を確認している。地山直上で確認される堆積層は、平坦面造成時に撹乱を受けているものが多いようである。旧地形は北東方向に向かって大きな谷地形が存在していたものと考えられ、最も深い部分を埋めたと考えられる TT112・TT113 では現地表下 5m 以上を掘削しても地山まで達しなかった。

西側丘陵部　TT011・019・020・024・025 ～ 027・031 ～ 033・038・039・045 ～ 047・050 ～ 052・066 ～ 068・074 ～ 076・083 ～ 085・091 ～ 093・106 ～ 111・126・129・130 ～ 135 が当たる。当地域は、TT066 および TT067 を丘陵頂点とする高まりである。北側傾斜面で TT025 や TT038 で不明落ち込みを確認したものの、遺物の出土は確認されていない。遺構・遺物が濃厚に確認されたのは南側緩傾斜面であり、TT066・TT093・TT106・TT107 ～ TT109・TT130・TT131・TT134 で 遺 構 が、TT075・TT093・TT108・TT107・TT110・TT111 で遺物の出土を確認した。特に TT075 では地山直上の、にぶい黄橙色粘土質シルトから出土遺物を確認することができ、これが本来の遺物包含層と考えられる。その層自体は、南側緩斜面に広く認められた。

谷部分　TT055 ～ 058・064・069 ～ 071・077・078・086・087・094 ～ 096・101・102・104・114 ～ 125・127・128 が当たる。当区域は、両丘陵の谷底部分にあたり、黒ボク土といわれる黒色土の堆積が著しい。黒色土中からは､石器の出土が多く認められ、出土した土器では TT070 で縄文晩期、TT116 で縄文中期？、TT123・124 で条痕文（弥生前期？）が認められる。東西両脇の丘陵部からの遺物流入も著しいようであるが、谷部分でも TT094・TT101・TT100 より北側の範囲では、地山とする明黄褐色粘土質シルト上でピット･土坑を検出することができた。TT094･TT101･TT100 より南側に向かって、極めて緩やかな傾斜地形を呈するようになる。TT102 では、掘削中に激しい湧水を確認した。湧水を利用した施設など、当時の活動痕跡が残されている可能性がある。

南側傾斜面　TT136～164 が当たる｡地表で確認できる湧水地点を含む範囲である｡黒色土直下には、地山のより低位層（粘土質シルトがなく、礫の比率が高い部分）が認められる。この範囲では、金属を対象とした砥石の出土が多く、磨石敲石類としたものも、金属を対象としたものの可能性がある｡また､TT159 からは土坑と近世陶器が見つかっていることから、近世期の活動痕跡が残されている可能性がある。TT144 では旧道脇に設けられた側溝とおぼしき遺構も見つかっており、これら近世の活動痕跡は旧道との有機的関連性も考えられるかもしれない。

東側丘陵部　TT061・062・072・073・079 ～ 081・088 ～ 090・097 ～ 100・103・105・165・169 ～ 182 が当たる。東側丘陵部は、TT088・089 の北西側で遺構と思われる落ち込みが確認され、TT165 で剥片の出土が確認された程度である。丘陵頂上あるいは南東側裾部では遺構・遺物は確認されていない。しかし、TT165 の北東側の緩斜面の区域で時期不明の土器片を採集することができた。このことから、特に南西側緩斜面側は、遺構・遺物がのこされている可能性が考えられよう。

笹平遺跡　遺跡は、境川左岸の河岸段丘上に位置している。同年度に 6,930 ㎡を対象として本調

査が行われたが、15Ba 区北端で弥生時代前期の土器棺墓 1 基が検出されたことから、調査区外北側の傾斜地形部を中心に調査を行った。

TT01 から TT03 のいずれからも丘陵上からの土石流堆積が確認されたのみで、遺構・遺物を確認することはできなかった。（川添和暁）

調査成果２　ここでは主に 10 月から 12 月までに実施した調査成果について報告する。調査の内訳は、大名倉丸山遺跡 39 カ所 (84 ㎡)、ハラビ平遺跡 17 カ所（64 ㎡）、上戸神遺跡 5 カ所（18 ㎡）永江沢遺跡 30 カ所（72 ㎡）、向橋遺跡 37 カ所（141 ㎡）、添沢遺跡 88 カ所（256 ㎡）である。本調査時に下層から石器の出土をみて急遽実施された川向東貝津遺跡では 11 カ所（75 ㎡）を 9 月に実施した。

大名倉丸山遺跡　平成 27 年度調査対象範囲は、北向き斜面の中位から下位に造成された平坦面に位置する。調査地は南東に向かって緩やかに標高が上がり、調査地東端部は南北方向に痩せた尾根状の地形が残る。さらに東側は切り立った崖となっている。

結果として遺構や遺物の検出は無かった。本調査が行われた平坦面は現況の耕作土と、すぐ下にも耕作土のような層が認められることから、新しい年代に複数回にわたって造成を受けている。造成以前から残存した層の分布も一部にとどまり、旧表土の可能性がある黒色土は調査地北辺沿いの TT13、TT14 等に分布する。反対に南辺部分の TT25 や TT30 では表土直下に地山が検出されたことから、元来は北西向きの緩斜面であった調査地を大きく削平し、北側に土砂を盛って平坦面を広く確保している様子が見える。範囲のほとんどで旧地表面は現況よりも高い標高に位置したものの、すでに滅失しているものと思われる。

ハラビ平遺跡　平成 27 年度調査対象範囲は南西向き斜面に位置している。現地形は宅地が 3 段に造成されており、調査においても全体で厚く堆積した造成土を確認した。

調査の結果、造成以前の旧地形は、調査地中央部に位置する北東―南西方向と、それよりもやや小規模な南東部の東―西方向の二本の谷が想定される。南東部の東―西方向の谷は、TT15 の下位に黒色土の層位が確認できたが、TT07 で縄文土器を検出した層はこれとは別の砂礫層であり、上位斜面より流れた土石流の中に混在していた可能性も考えられる。明確な遺構は見られなかった。

上戸神遺跡　調査対象地区は現況の国道より南、概ね全域が南西向きの斜面に位置している。TT09 は過去の範囲確認調査で土坑が検出されているため、連続部分も含めて本調査としての実施であったが遺構とは確認できなかった。遺構の基盤層と考えられている褐色砂層も掘り下げを行ったが、下位は径 1m におよぶ円礫が多数検出される砂礫層となり遺構や遺物は確認できなかった。

永江沢遺跡　範囲確認調査対象範囲は、北側の境川に向かって突出する尾根の裾部分に馬蹄形に設定された。トレンチは、調査範囲の両南端部分に設定した。調査範囲の東は北流する天堤川の左岸河岸段丘、西は天堤川と合流後の境川の左岸河岸段丘となっている。尾根上には設楽町指定天然記念物「八橋のウバヒガン桜」がある。

調査の結果、尾根の東側裾部分、TT07、TT08 では、表面に近い整地土層から 16 世紀代の天目茶碗の破片が検出された。この遺物を上限としてこれより新しい近代の陶磁器破片が同じトレンチより多く出土している。これらの遺物は尾根上から転落してきたと考えられ、近代以降に尾根上が小学校として整備される以前に居住などの土地利用が

あったと考えられる。

尾根西側では、小規模な河岸段丘上に耕作地を造成している。TT31 ではややしまりのある褐色シルトの層が地表下 1m 程度で観察された。落ち込みのように見えるものも検出されたが、内部に根を多く含んでおり、近現代の水田面造成以前に繁茂した植物の痕跡と推定した。

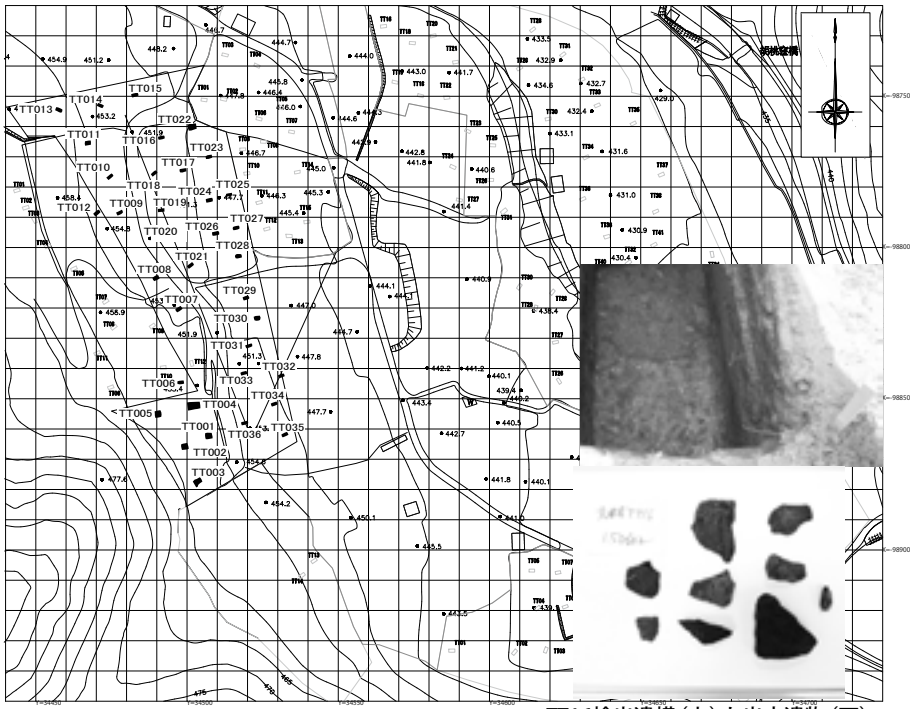
向橋遺跡　範囲確認調査対象範囲は、南北に流れる境川の東岸、河川敷と山裾の境界部分に位置している。斜面裾部分という立地から想定される通り、掘削を行ったトレンチの多くで、斜面上位からの土石流による砂礫が厚く堆積し、岩盤や確実な地山に到達することが困難な状況であった。調査対象地北東端の TT38 ではシルト層からなる水成堆積層が検出されたことから、河川敷に近い箇所においては高水位となる時期があったものと考えられる。遺構・遺物は確認できなかった。

添沢遺跡　範囲確認調査対象範囲は、国道 257 号線の南西側、旧添沢鉱泉の谷より西側に流下する沢が境川に合流する地点に位置する。この沢を挟んで尾根状の地形が西向きにわずかに突出する地形となり、現況はこの尾根状の地形全体に棚田が造成されている。

北側の尾根では、TT01~TT29 までの調査、南側の尾根では TT30 以降の調査を行った。その結果明確な遺構は検出されていないものの、国道よりも下位の斜面全域に安定した褐色シルト層の基盤層が検出され、基盤層上層に位置する黒褐色シルト層からは山茶碗の破片が検出された。一方の南側の尾根先端部は、前述の遺構が検出可能な安定した層は少なく、斜面の下位は河川堆積により、上位は土石流によると考えられる砂礫層で形成されている。河川敷と上位の段丘面の境界にあたる崖の下位では黒色土が検出され、須恵器（壷）口縁部が出土した。同様の層は接近した標高付近に帯状にわずかに分布するものの、広範囲では確認できていない。

川向東貝津遺跡　川向東貝津遺跡 15A 区の遺構検出面より下層から石器が複数検出されたことから、急遽範囲確認調査を実施した。15A 区の遺構にとっては基盤層となる黄褐色シルト層より、安山岩系・白色風化石材の石器が検出された。トレンチは最大で遺構検出面より 1 m の深さまで掘削を行い遺物の有無を確認した。石器・石材分布は、最上層の黄褐色シルト層にもっとも多いが、下位の河川堆積礫層の直上からも出土しており、下位にいたっても一定数の石器・石材の出土が認められる。石器・石材の分布範囲は、本調査 15A 区西端部に集中する。掘削を行ったトレンチでは、表面と上位には黒曜石を含む石器・石材が検出され、下位では安山岩系と白色風化石材の石器・石材を検出した。これについて、愛知学院大学の白石浩之教授から複数の文化層が存在する可能性を指摘された。

（鈴木恵介）

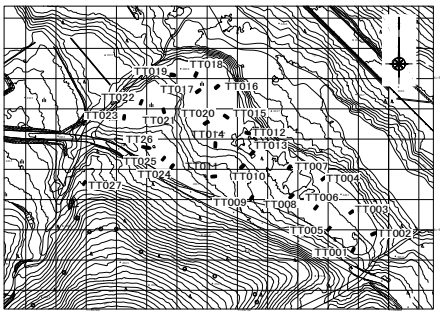


大名倉遺跡

TT16検出遺構（上）と出土遺物（下）



西地・東地遺跡

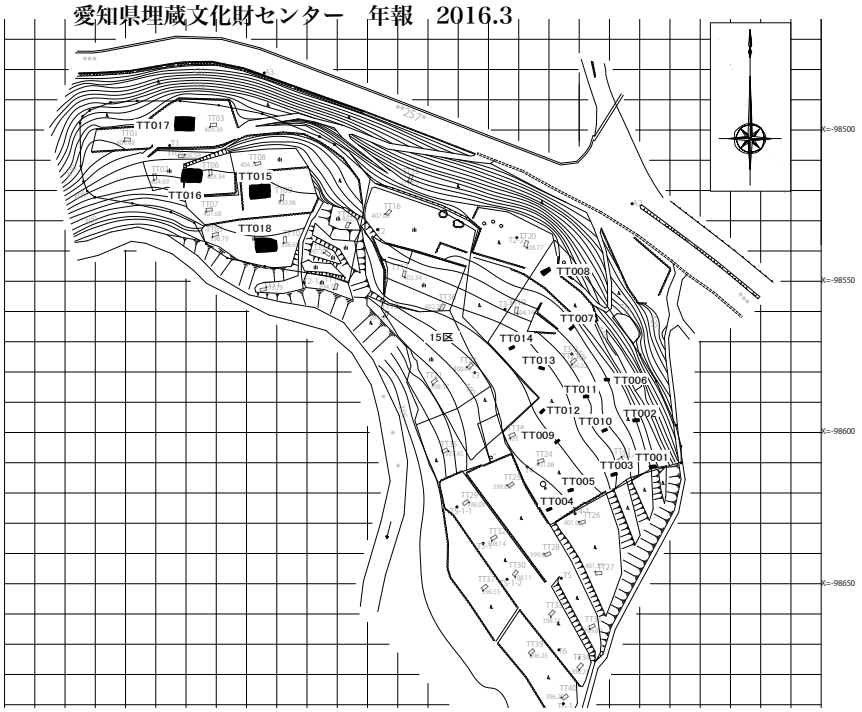


日掛遺跡

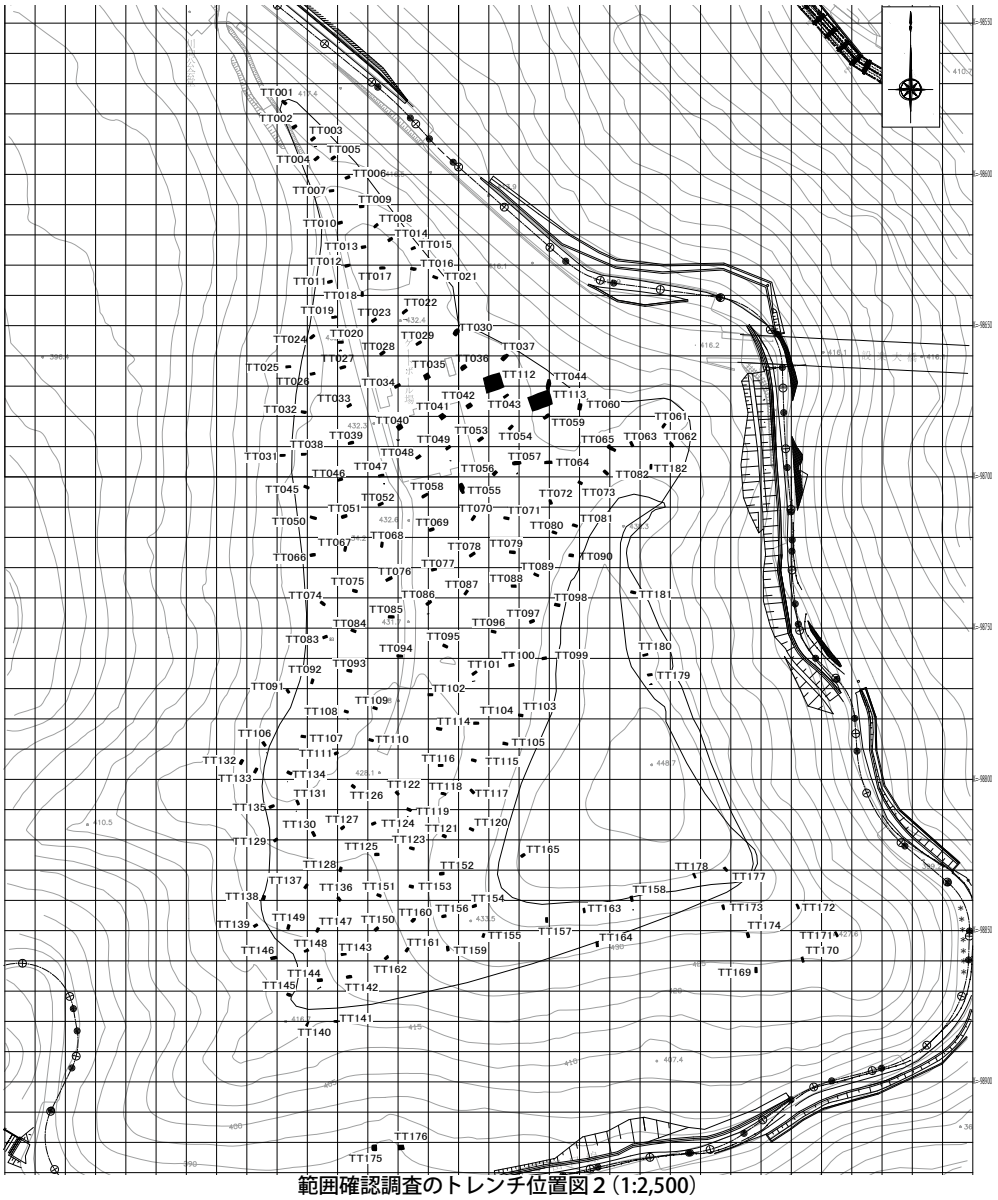


万瀬遺跡

範囲確認調査のトレンチ位置図１（1:2,500）

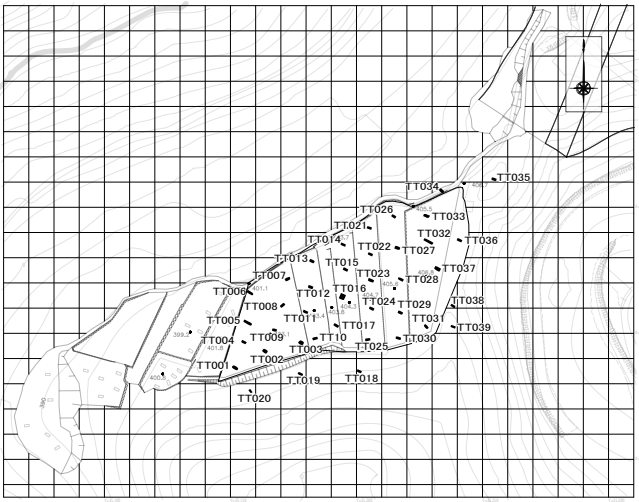


大栗遺跡

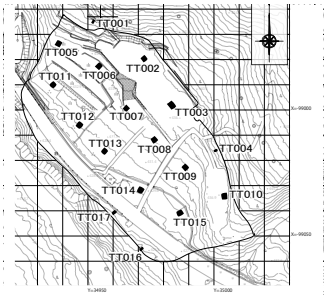


大畑遺跡

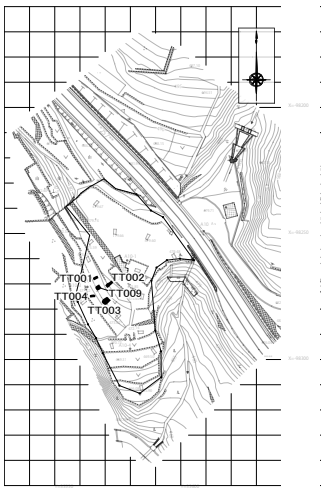
範囲確認調査のトレンチ位置図２（1:2,500）



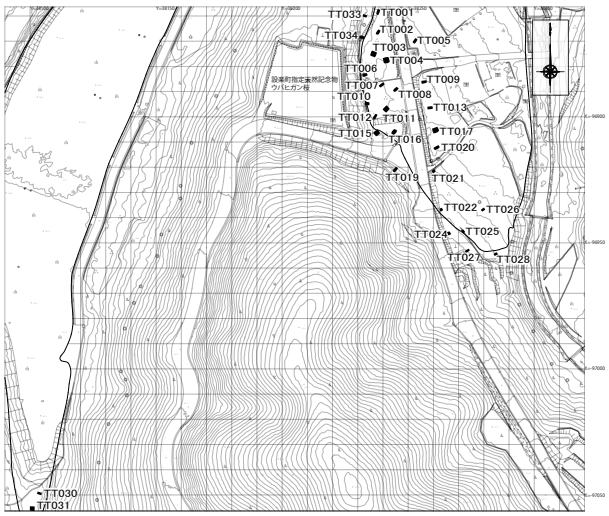
大名倉丸山遺跡



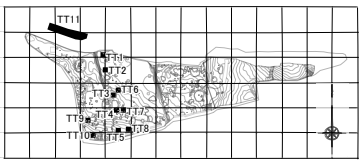
ハラビ平遺跡



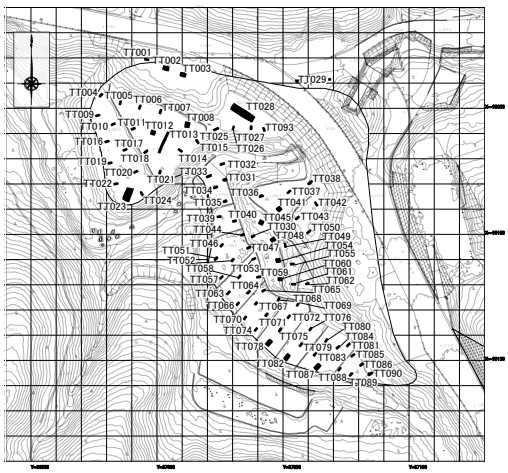
上戸神遺跡



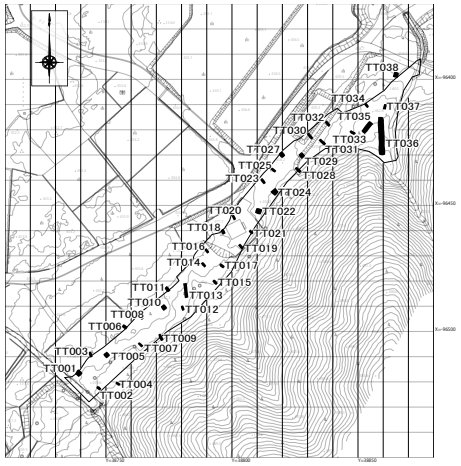
永江沢遺跡



川向東貝津遺跡



添沢遺跡



向橋遺跡

範囲確認調査のトレンチ位置図３（1:3,000）